

六 罪責の旅

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

(主、イザヤ四三・二五)

もし、あなたが侵入軍の指揮官であるとすれば、敵の防備の最も弱いところを探り出し、そこから敵を殺すために侵入するだろう。

聖徒たちの大敵であるサタンは、クリスチャンを徹底的にやつつけるでだてを持っている。

——彼は、それを幾度も幾度も用いるのである。彼は、私たちの盲点をつき、私たちを思いのまに操縦する。

人がキリストにある真の信者となると、サタンの家族から神の家族に生れるのである。サタンは私たちを、キリストの提供されるゆるしに対して盲目にしようと、あらゆる手段を尽している。しかし、数えきれない人々が、サタンの手かせ足かせをはずして、死からのちに移っている。これが、サタンを激怒させているのである。そして、だれかが福音に応答するたびに、サタン

は、顔を強くとたかれるように感ずるのである。

C・S・ルイスは、その著書「悪魔の手紙」の中で、地獄における日々の仕事を風刺し、クリスチャンたちをつまづかせようとして、一生懸命になっている悪霊たちの弱点や頭痛の種について述べている。

悪霊たちが、彼らの敵(クリスチャンたち)をなまぬくするのに用いた最も効果のある戦術は、クリスチャンたちに失敗を思い出させ、くよくよさせることであった。ひとたびクリスチャンたちが、その行いについて罪責を感じ始めると、彼らはもはや、サタンのプログラムに対する脅威ではなくなるのである。サタンの戦術は、たいして変っていない。なぜ、変える必要があるだろう。それは、うまくいっているからである。

サタンが最も喜ぶのは、信者を罪責の旅に出発させることである。

私は、過去を顧みる時、罪責こそ悪魔が絶えず私を操ろうとして用いたハンドルであった、ということがわかる。一つの実例は、私が神学校の三年の時に起った。私にはひとりの親しい友があった。私たちは、三年間の神学校生活を楽しく過していたのである。ある時私は、彼から幾らかの金を借りた。私は、二週間ぐらいで返せるからと言った。

一週間が過ぎ去った。私は、返す金ができないので、少し気になりだした。しかし、まだ一週間あるので、たぶん大丈夫だろうと思っていた。

二週間が過ぎ去った。しかし、どこからも金が入ってこない。私にはその友といっしょにいることが、重荷になり始めた。しかし、私はあえてその問題を持ち出すことはしなかった。彼が、支払い期日を忘れてくれればよいと願っていたからである。

日がたつにつれて、彼に会うたびに、非難の目つきで私を見ているように思われた。それで、私はできるだけ彼を避けるように努めた。支払い期日から二週間が過ぎ去ると、私は、彼に出会わないように毎日の計画を立てるようになった。それは、恐ろしいことであった。そのような親友を失うことは、実に耐えがたいことであるが、他方、なぜ、彼がもっと私の問題を理解してくれないのがわからなかった。私たちの間で、その金のことが話題に上ることは全くなかったのに、私は非常な罪を覚えた。そして、彼の友人のリストから、私を除外しているに違いないと思っていたのである。

ついに、ある日、恐るべき時がやって来た。ホールで、彼が私のほうへやって来るのを見たのである。隠れるところはどこにもない！彼は私を追い詰め、「ハル、君はいつたいたどうしたんだ」と言った。「実は……、君に借りた金のことなんだが……」と、私は弁解するような口調で答えた。彼は笑って、その大きな手を私の肩に置いて言ったのである。「兄弟、そんなことだろうと思ったよ。ごらん、ハル、ぼくは少しも変わっていない。ぼくの君に対する態度は、数週間前と少しも変わっていない。もし君が金を持っていれば、必ず払ってくれることを知ってるからだ。

しかし、金は、ぼくにとってそんなにたいした問題じゃないんだ。友情のほうがずっと大きな問題なんだ。そして、ぼくは今も変わらず、君の親友なんだよ。」

三週間、私は彼が自分を非難していると思いつづけていた。しかし、それはほんとうではなかったのである。——彼はなお、私の親友であったのである。

このことにより、私は、忘れることのできない教訓を与えられた。私たちは、だれかが私たちに悪感情をいだいていると思うとすぐに、仲たがいに、敵意をいだくようになる。それは、避けることができない反応であり、自己防衛のメカニズムである。

私は信じている。これが、クリスチャンと神との関係がうまくいかない第一の理由である。私たちは常に、多くの点においてクリスチャンとしての理想にほど遠いことを知っているのだ。神が私たちの行動を不快に思っておられるに違いないと想像するのは、全く自然なことである。私たちは、神のご要求の水準から遠ければ遠いほど、神が怒っておられると推測する。そしてついに、私たちは、神から離れ去り、神との生ける交わりを楽しむことなど全く不可能になってしまふのである。

そして、悲劇的なのは、このようなことは頭の中でそう考えているだけだということである。神は私たちに對して、少しも怒ってはおられないのだ！

私は、あなたがたのうちの幾人かが考えていることを知っている。私の言っていることがほん

とうだとは、とうてい信ずることができないのである。人間的なレベルでは、もし私たちが、人の要求通りにしなかったり、人々を怒らせたりすると、人々は私たちを疎外する。だから、もしあなたが多くの罪責を持っていると、神があなたに対して敵意を持たれるのは当然だと思うようになるのである。

今、私は、次のことを声を大にしてはつきりと言いたい。「今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした」(コサイー・二二)。

いつ、あなたは、「聖く、傷なく、非難されるところのない者」となるのか。彼が、あなたを御父に和解させてくださる瞬間である。そして、そのことは、あなたがキリストの身代りの死を信ずる瞬間に起るのである。

このことを聖書から裏づけてみよう。

新約聖書のギリシヤ語の原典には、和解と訳されていることばがいくつかある。一つは、マタイの福音書五章二四節に見出される「ディアッラッソー」である。この「ディアッラッソー」という語は、両当事者が互いに敵意をいだいており、その敵意の原因を取り除くことにより、和解する必要があることを意味している。この語は、聖書では、厳密に人と人との関係にかぎって用

いられている。

しかし、もう一つの語がある。それは、「アポカタルラッソー」で、常に神と人との関係において用いられている。「アポカタルラッソー」は、一方の当事者のみが心に敵意をいだいており、交わりを隔てている障壁を取り除く必要があるが、他方の当事者は敵意を全く持っていないことを意味している。神は、私たちに對して敵意を全く持っておられない。神は常に、人を愛しておられるのである。それゆえに、神は、私たちの代りに私たちの負うべきさばきを負い、私たちの罪が築き上げた、神ご自身と私たちの間のあらゆる障壁を取り除くために、人となってくださいなのである。神の側には、和解する必要は少しもない。人の側にこそ、和解する必要があるのである。

聖書に記されているように、「……神は、キリストにあつて、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせない」のです。なぜなら、「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるため」だからです(Ⅱコリント五・一九、二一)。

それは、公平な交換であるようには見えない。彼は、私たちの罪を得られ、私たちは、彼の義を得たのである。しかし、事実そうなのである。それは、人をご自身に和解させるための、神の無比のご計画であつたのである。

このゆえに、神は、キリストを受け入れたすべての者に、事実上、「あなたがたは、今、私の前に、聖く、非難されるところのない者です」と言うことができるのである（コロサイ・二、エペソ一・四）。

あなたは、あなた自身も含めて、自分を全く聖い、非難されるところのない人間とみなす他人を考へることができであろうか。私にはできない！ しかし、それでも、私たちは、神の目にはすでに、完全なのである。将来、完全になるのではなく、現在、完全であるのである！

これは、私たちがクリスチャンに値する者になるように努力している時に、一時的に与えられる状態ではない。ひとたび神が、私たちをご自身の御子に結合されると、私たちは御子の義を着せられる。そして、神は私たちを、聖く、非難されるところのない者として見てくださるのである。なぜなら、神は、イエスをそのように見ておられるからである。経験的には、私たちは全く不完全であるかもしれない。しかし、私たちが神の目に受け入れられているという事実は、決して、私たちの行動に基づいているのではない。むしろ、私たちがキリストのうちにあり、神がキリストを完全に受け入れておられるという事実に基づいているのである。

これらの解放の事実を知り、このことを、瞬間瞬間において真理とみなすことは、神に喜ばれる生活をする上で、最も重要な要素である。あなたは、あなたを愛し、あなたを受け入れてくれる者に対しては、愛と服従をもって応答せざるをえないのである。

今やサタンは、私が語ったことを、クリスチャンに知らせまいとして、一生懸命になっている。そして、サタンは、今日のキリスト教界において、結構うまくやっているのである。サタンは、クリスチャンたちに、わずかばかり勝利の生活を味わわせる。それからサタンは、再び彼らに重砲をもって攻撃してくるのである。彼は、クリスチャンたちに、神の期待を裏切らせ、その目を彼ら自身に注がせる。一連の失敗の後に、サタンは彼らを、私が、「罪の症候群」と呼んでいるパターンに陥れるのである。

罪の症候群

まず第一に、私たちは、知りながら罪を犯す。もし私たちが、罪を十字架に関係づけなければ、当然の結果として、私たちは罪責を持つ。そして、罪責は常に疎外に導く。このようにして、罪、罪責、疎外という症候群が起きるのである。

さて、人は、罪責を持ったまま生きることができない。それで彼は、罪責を次の二つの方法——それらは、二つとも間違っているのだが——のいずれかで処理しようとする。

もし彼が、特に敏感な良心を持っていないタイプの人間であるなら、彼は、自分自身を正當化しようとする。彼は、次のような口実を設け、なぜそのようなことをしたか、妥当な理由を述べるのである。

「それは、ほんのちょっとしたことでした。堅いことを言わないほうが、関係者全員にとってよかったのです。」

「結局のところ、政府は、私の税金を私が賛成していないことに使おうとしているのです。」
「しかし、私たちは、ほんとうに愛し合っています。そして、そんなことは、だれでもしていることなのです。」

私たちが自分の行為を正当化する時、その結果としてもたらされるのは、神との交わりが失われたという感情である。なぜなら、私たちは心の奥深いところで、自分自身に対して、あるいは神に対して正直でなかったことを知っているからである。私たちは、自分のよこしまのゆえに、神のお気にさわるようなことをしたということを感じている。そして神が立腹しておられると感ずる時、私たちはまた、神から疎外されていると感ずるのである。神が怒っておられるのではない、私たちが、そう思っているだけだということを、忘れないようにしてほしい。

人が罪責を扱うもう一つのやり方——そして、このやり方も、同様に間違っているが——彼は自分自身を責めることである。彼は、同じ分野でくり返しくり返し罪を犯す。罪責が始まる。そして、彼は自責の旅に出發するのである。

サタンは、これらの「敏感な」クリスチャンを誘惑するのが好きである。サタンは容易に、彼らが神の御前につまらない虫のような者であることを感じさせることができる。サタンは、折っ

ても神は聞いてくださらない、そして、たとえ聞いても答えてはくださらないと、彼らに確信させるであろう。サタンは、彼らの目をそのさもしいクリスチャン生活に集中させ、「神は、私を用いてはくださらない」と、確信させるのである。

サタンは、私たちに私たち自身を非難させておいて、自分はいすに座ってくつろいでいるのである。サタンに関するかぎり、私たちは、神にとって役に立たない者となってしまっているのである。

この点において、あなたは次のように質問するかもしれない。クリストにある信者の生活において、ほんとうの意味での罪責といったようなものがあるだろうか、と。

私が、「律法的な」罪責と呼んでいるものがある。これは、この世に生れてくるすべての人が直面しなければならない、のろいである。それは、各人の生れつきのままの罪のとがめであり、神と人との間の障壁となっているものである。クリストは、私たちのために十字架にかかってくださった時、この障壁を取り除いてくださった。このことについては、後で更に詳しく述べることにしたい。

次に、罪責の「感情」がある。これはサタンが、神の期待に背いていると感じているクリスチャンに、喜んで積み重ねているものである。この種の罪責は、サタンの道具であり、神の子らの生活にあってはならないものである。

最後に、使徒パウロによって、コリント人への手紙第二、七章八―九節で、悔改めに導く「悲しみ」として述べられている、聖霊によって、罪を自覚させるお働きがある。もし御霊の、罪を自覚させるお働きによって引き起される、「神のみにこころに添った悲しみ」が悔改め、あるいは回心を導かないなら、それは、第二の種類の罪責、罪責の感情——クリスチャンの神と共にある歩みにとっては、致命的なものである——をもたらすことであろう。

罪を犯した時、私たちはそのことを神に告白する必要がある。そしてもし、神が私たちを愛し、受け入れてくださっていることを確信しているなら、私たちは、自由に神に対して罪の告白をすることができるのである。私たちが罪を自認し、あるいは告白した後に、なおゆるされていないと感じ続けるなら、それは、私たちの注意を神のゆるしではなく、自分自身に向けている徴候である。そのような時私たちは、自分たちの罪深い弱さが、神のゆるしの力よりもっと強力である、と言っているのである。神は、私たちをゆるすほどには偉大なおかたではないのか、それとも、私たちをゆるすことを欲してはおられないのかのどちらかである。

いずれの場合でも、ある人の生活の中に、解消されないままの罪責があると、その人は神から疎外されているように感ずるだろう。その人は、聖霊を通して生活の中に働いてくださり、肉の誘惑とサタンのこうかつな策略から救い出してくださる神に信頼することをしないのである。彼がもし、神は自分に対して怒っておられると信じているなら、助けを求めて神のみもとに来よう

とはしないであろう。

罪責にとらえられているクリスチャンは、肉の力によって、神をなだめようとし始めるだろう。それによって、更に挫折感を増大することになる。なぜなら聖書には、「肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです」(ローマ八・七)と記されているからである。

イスラエルの王ダビデは、確かにこのような進展を理解していたと思う。彼は、罪を犯すことと、その影響についてかなりよく知っていたのである。彼は、他人の妻バテ・シェバに対して姦淫の罪を犯したのみでなく、後にその罪をおおい隠すために、その夫を殺すことを計画したのである。

ダビデは晩年、詩篇一三〇篇を書いた。それは、彼がその苦難に満ちた経験から、どのようなことを学んだかを示している。特に、次のくだりに注意してほしい。「主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましよう。しかし、あなたが赦してくださいからこそあなたは人に恐れられます」(詩篇一三〇・三一四)。

「目を留める」と訳されているヘブル語の原語は、何かについて個条書きに記録する、という意味である。ダビデはここで、「主よ、もしあなたが、私の罪を個条書きに記録する天の帳簿係であられるなら、私は、全く困惑してしまうでしょう」と言っているのである。

ダビデは、神の自分に対するお取り扱いから、何を学んだであろうか。彼は、「あなた(神)が赦してくださいるからこそあなた(神)は人に恐れられる」ということを学んだのである。「恐れる」と訳されているヘブル語は、だれかを敬虔の念をもって信頼することができるという意味である。

ダビデはここで、一つの風変りな真理を指摘している。その真理こそ、私たちが神について知りうる、最も重要な事柄の一つなのである。もし神が、私たちの罪を個条書きに記録し、それをつきつけるおかたであると考えたら、私たちは神を信頼することはできない。神に対して、ダイナミックな、大胆な信仰を持つことは不可能になる。なぜならあなたは、すべての欠点にもかかわらず、あなたをほんとうに愛し、完全に受け入れてくれていると信ずる人のみを信頼することができからである。

キリストが十字架において、どのようなことをしてくださったかという真理は、あなたがこれまでに学んだ中で、最も重要な真理である。それは、日ごとにあなたの頭を満たすべきことである。

キリストが十字架において成就された絶対的なゆるしを、真理と見なすことは、力強い信仰を持つための土台である。神が、あるがままの状態であなただけを受け入れてくださっていること、そして、愛する方によって受け入れられている(エペソ一・六)ということがどういふことであるか

を知らなければ、ほんとうに信仰をもって神に応答することはできない。愛する方というのは、神の愛する御子、イエスの称号である。神は、私たちすべてを、イエスのうちに包み込まれた者として見てくださる。神が愛する方である御子を受け入れておられるのは、私たちが受け入れておられることである。

たとえ一瞬間でも、神に完全に受け入れられていないなら、それは、私たちがキリストの外にあることを意味している。そして、そのようなことはありえない。彼は私たちに行かせることはなさらない。それは、すばらしいニュースではないだろうか。

サタンは私たちが十字架に対して盲目にする

サタンは、私たちを、これらすべてのすばらしい真理に対して盲目にしたいのである。

実際サタンは、日ごとに私たちが盲目にしようと努めている。私たちはそのことを理解さえしないかもしれない。しかし、神の御力が私たちの生活に短絡している第一の理由は、キリストの十字架が日ごとに何を意味しているかを、全く学んでいない点にある。十字架は、神が私たちを受け入れ、ゆるされる、継続的な土台である。

私たちは皆、山頂にいますような経験——聖霊が私たちの生活において顕著に働いておられるという経験——をしたことがある。しばらくの間はすべてがすばらしい。それから、なぜかわから

ないが、下降線をたどり始める。霊的なたるみが、私たちを弱らせ、いったいどうしたのかといふかるのである。

私は、過去において、この苦しい下り坂をたどったことがある。そして、そのたびに、ほんとうの問題点があるかを発見したのである。それは私が、「罪責の旅」へ出発していたことであつた。私は、八神の目から見れば、すでに神のご期待に背いたことをゆるされているV^{（注）}ということを感じていなかったのである。ゆるされているかどうか疑わしいかのように、神にゆるしを乞い求めるのではなく、ただ、すでに事実となっているゆるしを、要求すればよかったのである。

信者の弁護士

主は、彼の子どもたちが、敬虔な生活を送り、罪を犯さないことを望んでおられる。しかし、私たちの全知である父なる神は、私たちの性質を知り、神の子らが誤りを犯した時の備えをもされたのである。

使徒ヨハネは、その時代の新しい信者たちに次のように書き送った。「私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護してくださいる方があります。それは、義なるイエ

ス・キリストです。この方こそ、私たちの罪のための、——私たちの罪だけでなく全世界のための、——「なだめの供え物なのです」（イヨハネ二・一二）。

弁護してくださいる方というのは、弁護士のことである。なぜ、私たちは、私たちの父であられる神の御前で、弁護士を必要とするのだろうか。私たちのうちの大部分の者は、八それは、父なる神が私たちをおさばきになることがないように、イエスが、私たちを、御父に対して弁護してくださいることを意味するV^{（注）}と考える。そうだろうか。絶対にそうではない。イエスの十字架ににおけるみわざのゆえに、御父は、決して私たちを再び罪に定めることはなさらないのである。

「なだめの供え物」と訳されていることは、正義を満足させることにより、当然の怒りを追放するということを意味している。キリストの十字架におけるみわざは、すべての人の犯す、すべての罪に対する、聖なる神の怒りを担うことであつた。「なだめの供え物」という神学的なことは、砕いて言えば、「神はもはや、私に対して怒っておられない」ということを意味している。

父なる神は、私たちの罪に対するすべての怒りを、十字架上のイエスに注ぎ出された。今や御父は、たとえこらしめる時においても、完全な正義の土台に立つて、私たちを愛をもって取り扱うことができるのです。

神は仕返しをされない

あなたは、このことを理解しているだろうか。

神は、罰することをなさらない。処罰は、「仕返し」を意味する。そして、神はそれをなさらない。彼はすでに、私たちのすべての罪に対して、イエスに「仕返しをしておられる」。神は、ご自身の子らを「こらしめられる」ことがある。しかし、それは常に愛をもってであり、決して怒りをもってではない。「こらしめ」という語と、「訓練」という語は交換可能である。神のこらしめは、常に前向きである（ヘブル二・五―三）。

神は、ご自身の子らが、誘惑から救い出してくださる聖霊により頼むことを、絶えず拒否しているのをごらんになる時、その幸福を願う深い関心から、ご自身により頼むように訓練することをお始めになる。神は私たちが聖い生活をしている時にのみ、幸福であることを知っておられる。これが、ほんとうのこらしめであり、それは処罰とは全く異なるものである。

時には、このこらしめがづらいものに思われることがある。しかし、もし私たちが、人の上に起るすべての事柄は、私たちの天の父の愛の御手により許容されたものである√ということとを学んでいるなら、こらしめに対してすら感謝することができるのである。

不幸にして、この点において多くの信者がサタンの犠牲になっている。彼らは、罪に対する処

罰を絶えず恐れながら生活しているのである。

私たちの大部分は、「戸だなの中がいつ」のように私たちを悩ます、過去に犯した二、三の特にひどい罪を持っている。困難や災難が私たちを襲う時にはいつでも、そのがいつつを引っぱり出し、「おお、そうだ、神は私に、『あの罪』の仕返しをしようとしておられるのだ」と言うのである。

ある人々は、ずっと以前に犯した罪、あるいは現在かかわっている罪のゆえに、雷に打たれて死ぬのではないかと、神が仕返しのために、彼らの子どもたちのひとり殺そうとしておられるのではないかと恐れ、びくびくしながら生活している。

神が、私たちをそのようなお取り扱いになることはない。確かに逆境は、信者の生活に許容されている。しかしそれは、神を信頼することを教えるためのもので、私たちに復讐し、私たちを滅ぼすためのものではない。

しかし……

さて、あなたがたのうちの幾人かは、次のように言うかもしれない。「よろしい、ハル、もし神が、決して私たちの罪のゆえに罰せられないならば、ガラテヤ人への手紙六章七節の『思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取り

もすることになります」というみことばはどうなのか。」

信じられないほどの多くのクリスチャンが、文脈から切り離してこの節を用いている。この節の直前の節は、「みことばを教えられる人は、教える人とすべての良いものを分け合いなさい」(ガラテヤ六・六)である。この文脈は、聖書を研究し、教えている人を金銭的にサポートすることについて語っているのである。

神の事業のために投資するというこの同じ考え方は、コリント人への手紙第二、九章六節にもある。「私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。」

「人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります」というこの考え方は、金銭を神の事業に投資すること、および私たちのスチュアードシップの報酬に関することなのである。

この個所を、神のこらしめの方法に適用するのは、神が現在ご自身の子らを取り扱っておられる恵みの原則と真っ向から対立することになる。

サタン、老獪な罪責旅行者

あなたが、罪を認め、ゆるされていることを覚えていてもなお罪責を感じるなら、それをあなたに植えてくれている者がだれかを推測していただきたい。それは、老獪な罪責旅行者であるサタンである。

老獪な罪責旅行者は、罪を植えつけてあなたを悩ませようとする。

ンである。

サタンは、神が十字架において、あなたの罪を処理してくださったことを、あなたが思い起すのを望まない。それゆえ、あなたは父なる神の前に弁護士を必要としているのである。サタンの名は、告訴者を意味する。犯罪の事実を申告し、犯人を裁判にかけようとすること。キリストは、御父に対してあなたを弁護されなくてもよいのである。彼は、御父の前で、サタンに対してあなたを弁護しておられるのである。

今日おそらく、天において神の御前で、次のような光景が展開されていることであろう。私たちは、このようにサタンの戦術を少しばかり洞察できたことを、ヨブに感謝する。

サタンは今日、神の子らひとりひとりの書類を持って、法廷に出ている。彼は、ブズやトムやカリンの一件書類を持っている。そして特に、ハルの大きなファイルを持っているのである。彼は、被告を指さして言う。「あつ、ハルがいる。彼はあなたの子どものひとりですね。ハルがどんなことをやったか、ご存じですか。」

このようにして、サタンの論告が始まるのである。

それから、イエスが進み出て言われる。「御父よ。ハルは、一九五六年に私を信じました。私が十字架において代価を支払ったゆえは、その時ハルに適用されました。これが私たちの唯一の言うべきことです。」

そして、御父は、「本件を却下します！」と言われるのである。

神は、ご自身以外のだれにも、ご自身の子らをこらしめさせることをなさらない。神は、それを愛をもつてなされる。なぜなら、神は、恵みにおいて私たちを自由に扱うことがおできになるからである。神は、ご自身の内住の御霊——神はこの御霊を、信者ひとりひとりの中に住まわせておられる——によって、日ごとに、私たちをイエスに似る者としておられるのである。

旧約聖書の絵

旧約聖書には、キリストの、信者のためのとりなしのみわざについてのすばらしい絵がある。彼は、絶えず私たちを代表して父なる神の御前に出る時、私たちの名をその心に刻みつけておられるのである。

私たちは、このことを、旧約における大祭司の慣行から教えられる。彼は、幕屋の中に入り、契約の箱の前に出て香をたいが、それは祈りの絵であった。

彼は、胸当てをつけており、それには宝石がはめこまれていて、各々の宝石にイスラエルの十二部族の名が一つずつ刻まれていたのである。

神は言われた。「アロンが聖所にはいるときには、……イスラエルの子らの名をその胸の上に載せ、絶えず主の前で記念としなければならない」(出エジプト二八・二九)。

これは、イエスがあなたの名をご自身の心に持って、神の御座の前に絶えず出ておられることの、美しい絵である。

だからこそ、ヘブル人への手紙七章二四—二五節で、私たちは、次の三つの励ましのことばを持つのである。「しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることはない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、永遠に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです」(英訳)。

この一風変わった保証の約束によれば、ひとたび私たちがキリストを救い主として信じたなら、再び失われたり、ゆるされなくなったりすることはありえないのである。神の子どもが失われるとなれば、キリストは、その者のためのとりなしの祈りをやめなければならないだろう。しかし、約束は、「ご自分によって神に近づく人々を、永遠に救うことがおできになります」となっている。「永遠」は、非常に長い時間である。

イエスご自身が「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」(ヘブル一三・五)と、約束された。神に感謝すべきことには、「キリストはいつも生きていて、私たちのために、とりなしをしておられる」のである。そして、それゆえに私たちは、「あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づく」(ヘブル

四・一六 ことができるのである。

サタン、神の前と良心に訴える者

サタンは、私たちを神の前に訴えても少しも進展がないと、今度は私たちの良心に訴え始める。
サタンは、私たちに、次のような絶望的なくり返しをさせるのである。すなわち、罪を犯す、再び罪を犯さないと誓う、罪を犯さないように努める、そして再び罪を犯す、という過程のくり返しである。

それは、次のようにしてなされる。

まず第一に、サタンは、弱い領域において活動を開始する。どのクリスチャンも、特に弱い領域を少なくとも一つは持っている。私たちは、今もお、私たちを誘惑する古い罪の性質を、うちに持っており、私たちが、誘惑を克服するために、内住の聖霊により頼んでいない時、罪を犯すのである。

よいクリスチャンになろうとして、私たちは、「神よ、私は自分が間違っていたことを知っております。私をゆるしてください、ありがとうございます」と、言うかもしれない。私たちの重荷は取り去られ、すべてが、しばらくの間はうまくいく。それからサタンが、再び同じ領域において私たちを倒すのである。私たちは、自分がそのような恐ろしいクリスチャンであること

を知って、自分自身を憎む。しかし、私たちは神のゆるしを受け入れて、行動し続ける。——ただ、私たちは、神のために生きるという意志の力が、それほどまでに弱いことについて、少しばかりの罪責を覚えているだけである。

すぐにサタンは、同じ領域において、再び私たちに罪を犯させる。そして今度は、私たちは、人間として全く価値のない者であると感じているので、「おお、神よ、もしあなたが、もう一度だけ私をゆるしてくださいなら、私はこのことを、もう二度としないことを誓います」と約束する。

このニュースを聞いて、サタンとその手下である悪霊たちは、勝利の万歳を叫ぶ。サタンは彼らを、彼が望んでいたところ——罪の絶望的なくり返し——へ追いつめたのである。

私たちは、神をお喜ばせしようとして、一生懸命になる。ただ私たちは、肉の力によってそれをするのである。一生懸命になればなるほど、失敗する。そして、失敗すればするほど、もう決してしないと強く誓うのである。

それから、サタンが介入し、非難の口調で次のように言う。「だめだな！ 今度こそ神は、おまえをゆるさない。おまえは、それをしてしまったのだから。もう二度と、神はおまえを寛大に取り扱わないよ。」あるいは、あなたがもっと利口で、そのような極端な口車にひっかからないと見て取ると、サタンは次のように言うだろう。「神は、おまえをゆるすかもしれない。しかし、

神は、おまえがどんなに頼むに足りない人間か、ということは忘れない。おまえは、もう以前の
ように、神に用いられることはないのだ。」

それは、言い古されている「羽の折れた小鳥は、決して再び、もとのように高く飛ぶことはな
い」ということわざと同じである。

あなたは、徹底的にやつつけられている！ あなたは、次のことを忘れているのだ。すなわ
ち、問題は、△神は、あなたをおゆるしになるだろうかというのではなく、△あなたは、神
がすでにあなたをゆるしておられることを信ずるか、そして、神が、罪に背を向ける内的な力を
与えてくださることを信じ、神に信頼するかということである、ということをお忘れしていること
にある。

私は、△私たちは、自由に罪を犯してもよいし、良心のとがめを感じることもない。だから、
そんなに神経質になるな▽と、教えようとしているのではない。聖霊は、忠実に信者の罪を指摘
されるであろう。しかしそれは、信者が罪を告白してゆるしを得るためではなく、ゆるされてい
ることを主張して再び神を信ずるためなのである。

◎神は、私たちが罪を思い出してくよくよすることを望んでおられない。むしろ、ゆるしに思い
をはせることを願っておられるのである。もしあなたが、絶えず自分自身に注意を集中するな
ら、あなたは、「△私たちの心を散らすいっさいのものから目をそむけて……」……イエスを仰ぎ

見ながら……」(ヘブル二・二詳訳聖書)というわけにはいかないのである。

イエス・キリストが十字架においてどんなことをしてくださったかを理解する時、罪を犯し統
けている間も、神は決してあなたをゆるすことをおやめにならないことを悟るのである。――た
とえ、あなたが、罪を犯している時のゆるしがもたらす慰めを、正しく評価できなくてもである。

キリストが十字架上で死なれた時、あなたの罪のうちのどれだけが、まだこれから犯される罪
だったのだろうか。あなたの罪が、全部、まだこれから犯される罪だったのである。

私はかつて、次のように考えていたことがある。すなわち、私がキリストを受け入れた時、そ
のことは、それまでに犯した私の罪のために、キリストが死んでくださったことを意味し、それ
以後に犯した罪については、その一つ一つ、全部を告白しなければゆるされないだろうと考えて
いたのである。それは、危険な考え方である。なぜなら、あなたは決して、自分の犯した罪を全
部告白したと確信することはできないし、神からつきつけられる罪が、まだ、一つか二つは残っ
ているかもしれないからである。

ある日、私は、コロサイ人への手紙二章一三節、「あなたがたは罪によって、また肉の割礼が
なくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくだ
さいました。それは、私たちのすべての罪を赦し」にある、すべてということばが何を意味して
いるかを悟った。

私たちは、イエスを受け入れる前には、死んでいた。霊的に死んでおり、神を生ける現実として、人格を持ったおかたとして知ることができなかったのである。

それから聖書は、「神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かして、くださいました」と述べている。これは、新生——あなたがキリストを信じた瞬間に霊的ないのちを与えられる経験——について、語っているのである。なぜ、このことが可能なのだろうか。「私たちのすべての罪を赦し」とあるからである。

「赦し」と訳されているギリシア語の動詞は、一度かぎりのもので、くり返される必要のないことを意味している。最終的な行為なのである。神の御思いにおいては、この、すべてというのは、どれだけ多くの罪を意味しているのだろうか。神は、私たちの罪を、十字架上のイエスにおいてさばかれた時、どれだけの数の罪を見ておられたのだろうか。

答えは、すべての罪である！

神は、人生のパレードの全体をながめておられる

神は、ヘリコプターのパイロットがパレードを見おろすように、私たちの人生をながめておられる。私たちが、街角に立ってパレードを見る時、まず先頭を、続いて各々の分団が過ぎ去るのを、そして後尾を見る。連続的に見るのである。しかし神は、パイロットのように、パレード全

体をひと目で見ておられるのである。これが、あなたの人生を神が見られる方法なのである。あなたの過去、現在、未来は、神にとっては皆、今である。あなたが、イエスをあなたの救い主として信ずる時、神は、それよりずっと以前に、すなわち、紀元三三年に、あなたの人生をパレードが過ぎ去るように見ておられたのである。神は、あなたの全生涯、およびその罪と罪責を取り上げ、そのすべてをキリストの上に置かれたのである。

それで、あなたがキリストを救い主として信じた時、神は、あなたの罪のうちのどれだけをゆるされたのだろうか。信ずる以前に犯した罪だけをゆるされたのではない。一生涯の罪をおゆるしになったのである。神は、あなたのすべてをゆるすことができなければ、あなたを、ご自身の家族として受け入れることはおできにならないのである。

このことは、神が信者の罪を大目に見られることを意味するのではない。——それどころか、私たちが、罪を犯したことを悟り、それを認め、神のゆるしを受け入れる瞬間、神は、自由に私たちのうちに働こうとしておられることを意味する。

ヨハネの手紙第一、一章九節には、次のように記されている。「もし、私たちが自分の罪を言い表し続けるなら、神は真実で正しい方ですから、その罪をすでに赦し、すべての悪から私たちをすでにきよめてくださっているのです」(ギリシア語の動詞の時制の直訳)。神のみことばである聖書は、信者に十字架の後にゆるしを求めよ、とは決して言っていない。それは、すでに神と

の間で解決された事実なのである。そして、神は、私たちがすでに真実となっている事柄を要求することを、望んでおられるのである。

ヨハネの手紙第一、一章九節で、「罪を言い表す」と訳されているギリシャ語は、相手の言った、あることに対して同意を言い表すことを意味する。この場合には、私たちの罪に関して神に同意することを意味している。しかし、私は、私の罪に対する神の態度が、どのようなものであるかをはっきりと悟らないで、神に同意することはできない。

神に同意せよ

まず第一に、神は、ご自身が私たちの罪を見るようにして、私たちが自分の罪を見ることを望んでおられる——それは罪なのであるが。しかし神は、私たちがその段階でとどまっていることを望んではおられない。もし私たちが、自分の罪に関して、ほんとうに神に同意するなら、また、それをすでにゆるされたものとして見なければならぬのである。これが、神が罪をこらんになるやりかたである。最後に神は、私たちが罪に背を向け、これから先の歩みにおいて、罪に対して勝利を得る力を与えてくださるご自身に、信頼し始めることを望んでおられるのである。

もし私たちが、このようにして、自分の罪をさばかず、神のゆるしを受け入れず、また神の御力によって罪に背を向けないならば、サタンはやって来て、罪責のハンドルをにぎるだろう。サ

タンは、私たちに罪を自分でつぐなわせようとする。その結果、私たちは罪責を免れるために、自分自身を罰するか、あるいは、だれか他の人を罰するようになるのである。

だれかが値を支払わねばならない

私たちは、罪を犯すごとに、だれかがその値を支払わねばならないということを、本能的に知っている。私たちがそれを教えらるる必要はない。それは、私たちの性格の一部なのである。私

が罪を犯した時、自分がその値を支払うか、だれか（通常、私たちにとって最も親しい人々）に支払わせるか、あるいは、すでにその値を支払ってくださったおかたとしてのイエスを見上げるかのどれかをしなければならぬ。

私は、信者になって以来、この領域における数多くのカウンセリングの経験をした。私は夫が長い間海外に旅行しなければならなかった、ひとりの若く美しい女性のことを記憶している。夫の不在中、彼女は姦淫の罪を犯したのである。それが罪であることは、疑いの余地がない。

彼女は、それが罪であることを悟った。そして、そのことを神に告白したのである。しかし、彼女は、神が言われたこと——その罪がすでにゆるされたということ——を信じなかったのである。神のゆるしが、自分のケースにおいて真実なものであるとは思わなかったのである。彼女は、自分が思っているよりもっと悪い状態になっていった。なぜなら、解決されていない罪責

は、この地上における最も強い破壊力の一つだからである。

夫が帰って来た。彼女の頭に深く植えつけられていたのは罪であり、その罪からの、解決されていない罪責であった——それは、神がなお彼女を罪ありとしておられるゆえでなく、神の言われたことを信ぜず、自分自身をゆるさなかったためだったのである。

夫の帰還後二、三年して、第一子が生れた。サタンは、彼女の潜在意識に手をさしのべ始め、その罪責をしつかりと握りしめていた。すぐに彼女は、ひどいノイローゼになった。彼女は、自分の犯した姦淫の罪を、夫に告白した。そうすることによって、良心の重荷がなくなると思っていたのである。夫は彼女をゆるした。しかし彼女は、それでもなお、彼女自身をゆるすことができなかったのである。

彼女は、それをどう始末しただろうか。ある日、彼女の夫は、家に帰って来た時、彼女が自分の子どもをしめ殺そうとしているのを見出したのである。なぜだろうか。彼女は、この世の何ものにもまさって、その子どもを愛していた。愛する子どもを殺すことが、彼女自身に、その罪責の、最も重い刊罰を課する道だったのである。何という無意味な悲劇であろう！

最初、彼女はこのことを悟っていなかったが、カウンセリングの結果、明らかにになった。彼女の心の奥底に、この解決されていない罪責があったのである。これをイエス・キリストの十字架に結びつけ、「私をゆるしてくださいとありがとうございます」と言う代りに、自分がしてしま

ったことに対して、自分で罰を与えようとしたのである。彼女は、だれかが罪の値を支払わなければならないことを、本能的に知っていた。そして彼女は、自分自身で、支払おうとしたのである。罪責は、今日、この世において、人を最も意気消沈させる病氣である！

私の友人のひとりが、ある医院に行っていた時のことである。彼は、通りの向こう側にあるホテルの十階から、ひとりの女性がまさに飛び降りようとしているのを見た。彼は、急いで通りを横切り、エレベーターに乗って、今まさに飛び降りようとしている彼女をつかまえて、「待ってください。飛び降りないでください。どうか私に、しばらく話させてください」と言った。彼は、ゆっくり、そしてはっきり、「神は、あなたを、愛しておられます」と言った。

しかし、その女性は、ふり向いて、罪責と絶望の恐ろしい表情で彼を見つめ、そして再び顔をそむけて、飛び降りてしまった。彼女は即死したのである。

精神医やその他の医師は、解決されていない罪責が、精神病と自殺の第一の原因であると言っている。病院のベッドの半分以上が、情緒的な病氣を持っている患者で占められている。彼らにとって最上の療法は、神が、彼らを愛しておられること、そして、すべての罪を包含するゆるしを、彼らにも、キリストにあつて適用しうるものとしておられることを見出すことである。

神は、フロイトが精神病についての解答を与えるまで、待つておられなくてもよかったのである。私たちは、罪責について解答を得るために、精神医のところへ行く必要はない。イエスが、

約二千年前に、罪責に対する唯一の、真の答えを提供された。もし私たちが、神の言われたことを信ずるなら、私たちの良心をきよめて、私たちを死んだ行いから離れさせ、生ける神に仕える者とする、という答えがそこにあるのである。

私は、あなたが、このように意気消沈させる罪責によって苦しむのを望まない。私が願っているのは、あなたの生活において、瞬間瞬間神からの力を発揮すること——罪責のコンプレックスから解放され、神に向かって、「そうです、主よ、私は罪ある者です。しかし、私がゆるされていることを、あなたに感謝します」と言うこと——ができることである。

そして、神の御霊が、あなたの生活において、今、働かれることを信じていただきたい。あなたは、御霊が働いてくださるのにふさわしくなるまで、あるいは、行いによってそれを獲得するまで待つ必要はない。

私が読むたびに感動を禁じえない、聖書の個所がある。それは決して、古くさくなってしまうものではない。「いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました」(コロサイ二・一四)。

負債がない

これは、力強い、絵を見るようなみことばである。このみことばが書かれたころ、「債務証書」と訳されているギリシヤ語のことばは広く知られていた。人がローマの法廷で、有罪を宣告される時はいつでも、「債務証書」が作成された。法廷の書記官は、被告が有罪とされた犯罪を、一つ一つ個条書きに記した。この証書は、その囚人がローマ皇帝に対して、それらの犯罪についての定められた支払いをしなければならないことを、意味するものであった。その証書は、囚人が収監されるこの牢獄にもついてまわり、彼の独房の戸に釘づけされたのである。

使徒パウロは、人神はどのようにに私たちの罪を取り扱われるかVを示すために、何というすばらしい例証を用いたことであろう。千九百年前に、イエスが十字架にかかれた時、この地上のすべての人の「債務証書」は、イエスと共に十字架に釘づけにされたのである。

私たちが、思いやことは、あるいは行いにおいて、神の完全な律法に及ばない時、その都度、その事実が「債務証書」に記入される。ちょうど、ローマにおいて、その債務証書が犯罪者の独房に釘づけにされたように、イエスは、私たちの債務証書を取って、十字架に釘づけにされたのである。

なぜか。彼が、その値を支払おうとされたからである。

にされました」と記されているのである。私は、神の律法に完全に服従する義務を、神に対して負っている。しかし神は、決して、私たちの律法遵守を等級つけて評価することはなさらない。完全に守るか、全く守らないかのどちらかである。——そして、私は、支払うことができない。これが、「贖罪」ということばの意味である。すなわち、奴隷の状態にある者をあがない出し、身の代金を払って自由することなのである。私たちが自由にするために、キリストが払われなければならない身代金は、私たちが神の律法に完全に服従しなければならないという値である。そして、キリストは、負債の判決を完全に支払ってくださったのである。「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしき生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはならず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです」(イペテロ一・一八—一九)。

だからこそ、コロサイ人への手紙二章一五節には、「神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました」と記されているのである。

ここで、「支配と権威」とあるのは、サタンと彼のすべての軍勢のことである。そして、キリストは、彼らを武装解除されたのである！彼らはもはや、神の子どもに手を出す法的な土台を持っていない。サタンは、クリスチャンの生活に働きかける法的な土台を持って

ローマ法によれば、ある人が牢獄に入れられ、債務証書が戸に釘づけにされると、判決の執行が終るまで、それは釘づけにされたままである。判決の執行が終ると、この債務証書がはずされ、その上に、斜めに、「完了した」という意味のことが書かれるのである。それから、その債務証書は、囚人に手渡される。これで囚人は、その債務証書に記された罪によって罰せられることは、決まらないのである。

あなたは、この「完了した」ということばこそ、イエスが十字架上で叫ばれた最後のことばの一つであることをご存じだろうか。

イエスは頭をたれて、「父よ。わが霊を御手にゆだねます」と言われる直前に、勝利の叫びをあげられた。十字架上から、「完了した」と言われたのである。このように訳されているギリシヤ語の原語は、「テテレストアイ」で、「完済された」ということを意味する(ヨハネ一九・三〇)。

完 済

イエスは、私たちの債務証書を取り、その上に斜めに、ご自身の血で、「完済」と書かれた。私たちがゆるしを受け入れた後に、罪のためにさばかれることは決していない。それは天において、神のひとり子の御血によって永遠に解決されているのである。

だからこそ、コロサイ人への手紙二章一四節に、「神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけ

いないのである。私たちがもし、神を信ずることを欲しないなら、サタンに法的な土台を与えることになる。しかし、私たちがそうしなければならぬということは、絶対になのである。神は、私たちが、自由の大憲章——それはイエス・キリストの完全なゆるしである——を受け入れること、そして、罪を犯す時、「おお、主よ、私は、罪を犯したことについて、あなたに同意します」という心の態度で、ただちにみもとに来るべきである、と理解するように望んでおられる。しかしこれは、ゆるされるためではなく、ただ、すでに事実となっているゆるしを理解するためなのである。

キリストが十字架上で死んでくださった時、彼は、罪の問題を永遠に処理してくださった。他の犠牲は、全く必要ないのである。なぜだろうか。それは、犠牲となられたおかたのいのちの価値のゆえである。それは、旧約聖書に記されているやぎや雄牛の血——単に、罪をおおうにすぎない——のようなものではない。キリストが、罪のために死なれた時、彼は、それを取り去られたのである。

「また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。」（ヘブル九・一二）。

永遠とは、どんなに長い期間だろうか。神は、永遠以下のものを提供しておられるのではない。それは、イエス・キリストの犠牲の価値に基づいているのである。

「もし、やぎと雄牛の血、また雄牛の灰を汚れた人々に注ぎかけると、それが聖めの働きをして肉体をきよいものにする」とすれば、まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におさげになったその血は、どんなにかあなたがたの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。」（ヘブル九・一三——一四欄外注）。

奉仕の免許

これは、聖霊が私の心にもたらされた最も力強いメッセージである。それは、奉仕することの免許であり、罪を犯すことの免許ではなかったのである。神に完全に受け入れられていると知ることによって、もたらされる動機は、神との関係を失うことを恐れる動機よりも、はるかに強いものである。それは、全く比較を絶したものである。

神は、私たちが義務感からでなく、彼がイエス・キリストにおいてなしてくださったことへの感謝から、奉仕することを望んでおられる。

「あなたがたの良心をきよめて」——良心こそ罪責が深く根をおろす場所である——「死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とする。」

「死んだ行ない」とは、神が私たちの罪をゆるしてくださるのを助けようとして、あなたや私がする、いろいろな事柄である。それは、キリストが十字架において、完全に成就されたみわざ

に、何かを付け加えようとするのである。

死んだ行いは、私たちが、ほんとうにゆるされていることを信じないで、自分のしてしまったことをつぐなうために、何かをしようとする時になされる。

神は、私たちが罪を犯してしまった時、どのようにすることを望んでおられるだろうか。

私たちはそのような時、私たちの生活の中で、他のいかなる時にもまさって、神を必要としている。そのような時、アダムがしたように、神から逃げていてはいけない。アダムが罪を犯した時、神は園に現れて、「アダムよ、あなたは、どこにいるのか」と言われた。神はほんとうに、このように問いかける必要があったであろうか。神は、アダムがどこにいるかを知っておられたのではないだろうか。

アダムが身を隠したのは、恐れていたからである。彼はそのような時にもなお、神が自分を愛しておられることを、知っているべきであった。もしそうでなければ、神は、アダムを探すようなことはなさらなかったであろう。そしてアダムは、歴史上で最初の、死んだ行いをしたのである。彼はその罪責感を、いちじくの葉で隠そうとした。その罪と罪責を、自分の手のわざによっておおい隠そうとして、最初の「宗教的な」行為をしたのである。それが、ほんとうの意味での「宗教」である。——もしあなたが、それを正しく理解していればであるが……。

キリスト教は、宗教ではない。イエス・キリストと彼が成就されたみわざを通しての、神との

個人的な関係であって、私たちのわざによって、神の是認を得ようとするものではない。

神の家族

考えていただきたい！ 私たちは、神の御前に出ることができるのである。

「私たちは、心に血の注ぎを受けて邪惡な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか」(ヘブル二〇・一二)。

私たちが、知りながら罪を犯す時、神は、私たちが、「真心から」、正直に「全き信仰をもって」(すなわち、キリストが成就してくださったことを信じて)、ご自身に近づくことを望んでおられる。「このみこころに従って、イエス・キリストのからだに、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです」(ヘブル一〇・一〇)。

神は、私たちを愛し、受け入れてくださっている。ゆるされているのである。彼は、私たちが、自分のしたすべてを告白し、ご自身の与えてくださっているゆるしを感謝するように望んでおられる。もし私たちがこのことをしないなら、私たちは、やましい心を持つことになる。

私は、解決されていない罪責のために、精神病になった人々の、多くのいたましい実例を知っている。また、正気ではあるが、その生活に全く力のない人々もいる。彼らは、過去の経験に頼ろうとして、なぜ、以前のような力がなくなったのか、といぶかっているのである。

にもかかわらず、神に対して疎外感を持っていることなのである。

イエス・キリストが、私たちのために、ひとたびささげられたことによって、私たちに保証されているゆえにあることを知るのには、何と驚くべきことだろう。それゆえに、「ですから、彼はまた、ご自身を通して神に來る人々を徹底的に人完全に、申しぶんなく、決定的に、とこしえに変わることもなくいつも救うことがおできになるのです。なぜなら、彼は常に生きておられ、彼らのために神に嘆願される人とりなされる人仲介に立たれるからです」(ヘブル七・二五 詳訳聖書)と、記されているのである。

本書の読者のうちにもきっと、罪責のゆえに、長年にわたって苦境にあえいでいるかたもおられるだろう。あなたは、あなたの犯したひそかな罪、あるいは、神のみに対する公然の反抗のゆえに、神の罰が下るのを待っている。その罪責こそが、あなたが今、最も親密でなければならぬひとりのおかた——あなたの慈愛に満ちた天の父——からの疎外をもたらししているのである。神が、あなたを、その偉大な力強い愛の手で抱き、あなたを愛し、受け入れていないと、慰め、安心させてくださることがどのようにすばらしい経験であるか、おわかりにならないだろう。

さあ、神に今、そのようにしていただく。神はあなたを怒ってはおられない。——どんなに、神の期待に背いてでもである。神は、あなたの、ご自身に対するどのような違反行為をも全くゆるしておられる。今、神を悲しませている唯一のことは、ご自身の子らが、神のこの上ない配慮

七 戦いの武器

終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。悪魔の策略に對して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。私たちの格闘は血肉に對するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天に
いるもう一つの悪霊に對するものです。ですから、邪惡な日に際して對抗できるように、
また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりな
さい。

(エペソ六・一〇—一二)

歴史を顧みる時、国と国との戦争があつても、ある国は、中立を維持していたことがわかる。
しかし、本書で私たちは、中立でありえない戦いに従事していることを考察してきた。この戦
いにおいては、良心的参戦拒否権、徴兵回避者、安樂いすの將軍たち、どのような値を支払つて
も平和を、と唱道する者たちの存在は、ゆるされない。

今こそ、クリスチャンひとりひとりが、神の武具をつけて、キリストのために、立ち上がらな

ければならない時である。あなたが、年老いていようと、からだが虚弱であろうと、そんなこと
は問題ではない。主イエスがあなたの力となつてくださるのである。あなたが、まだ若く、あな
たの敵、悪魔の戦術に精通していなくても、そんなことは問題ではない。神の武具が、あなたを
守るのである。

しかしあなたは、「何でも自分自身でする」エキスパートであることはできない。あなたは、
決心、勇気、覚悟、知力、善良さを、あなた自身が集めて作った武具をつけることはできない。
サタンは、手製の武具のあらゆる欠陥を見出すことができ、また見出すことであろう。

この世の制度の中に働き、この世の善なるもの、美なるものすべてを自分の目的にあうように
ゆがめている、「暗やみの支配者」に對する私たちの唯一の防衛は、神の武具によって完全に武
装することである。それは、肉体とたましいと霊とを攻撃する誘惑への、私たちの唯一の防衛手
段なのである。

主にあって強められよ

私たちは、自分の力で、クリスチャン生活をすることはできない。あなたはおそらく、そのこ
とをすでに発見していることだろう。

主がご自身の力を、私たちに与えてくださるのを、受け入れることが不可欠である。それなし

には、私たちは、信じがたいほどの力を持っているサタンに立ち向かうことのできる見込みはない。人間的な力は、悪魔とその巧妙な「策略」に対しては、全く役に立たない。

「主にあって強められなさい」というパウロの命令は、原語のギリシヤ語では、更に力強いものである。この命令は、受動態である。そのことは、私たちが、その動詞が述べているような行為を受けることを意味する。その命令は、実際は、私たちが「絶えず、私たち自身が主によって強められるのを許容すべきである」と、言っているのである。換言すれば、主が強めてくださるのであり、私たちは、その結果を、自分たちの生活において享受するのである。

「主の御力」によって強められることは、どのようなことを意味するのであろうか。ルカは、その問いに対する答えを私たちに与えている。「さて、聖霊に満ちたイエスは、ヨルダンから帰られた。そして御霊に導かれて荒野におり……」(ルカ四・一)。

ひよっとすると、あなたは、「もちろん、イエスは、聖霊に満ちておられた。しかしそのことが、私にどのような影響を及ぼすのか」と、考えているかもしれない。

ヘブル人への手紙の記者は、イエスが、信仰の創始者であり、完成者であられたと告げている。それは、聖霊が人を通して生きられるという計画の全部を、イエスが案出しておられたことを意味する。しかしイエスは、天にいて、「さあ、あなたがたは、そのように生きなさい」と言うようなことは、されなかった。イエスは、舞台上に下がって来て、ご自身が信仰の生活をなし、全計

画がみごとに作動することをお示しになったのである。

彼は、ご自身の神性を用いることをやめられた

ピリピ人への手紙二章には、イエスがこの地上に來られた時、彼は、一時的にその神的能力の使用をやめ、この地球という遊星上において、他の人々がしなければならなかったと同じ生活をする、という道を選ばれたことが記されている。もし彼が、それ以外の道を選んでおられたとするなら、彼は、ほんとうの人間ではなかったであろう。そして、私たちに代って、私たちの罰になうという資格に欠けていたことであろう。

また、もし彼は、半分人間、半分神の力をもって、人生の問題を処理しておられたとするならば、私たちが倣うことのできるような模範を示されることはなかったであろう。私たちは、半分神ではないので、スタートする前に、すでにおくれをとっていたことであろう。

イエスが、私たちに知らせようとしておられる偉大な真理は、彼が、私たちに期待しておられるのと同じ生活——彼ご自身を通して聖霊によって働いておられる父なる神に、瞬間瞬間より頼む生活——をする道をお選びになったということである。この世の人々が、イエスのご生涯として知っている、あの並はずれた生活は、実際には、イエスによってなされた生活ではなく、イエスのうちにおいて、聖霊によってなされた生活であったのである。

ある日、ひとりの友人が、私に、「神のみこころに全く従って、クリスチャン生活を送った、ただひとりの人はだれだと思うか」と質問した。しばらく考えてから私は、「もちろん、イエスだよ」と答えた。

彼が、「違う。イエスは、そのようなクリスチャン生活を送られたのではない。聖霊が、イエスの中において、そのような生活を送られたのだ」と言ったので、私はショックを受けた。

私は、このことについて、しばらく考えた結果、二、三の聖句に光を与えられた。特に、ヨハネの福音書一四章一二節を理解する上で、助けとなった。そこではイエスは、「わたしを信じる者は、わたしの行なうわざを行ない、またそれよりもさらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです」と言っておられる。

イエスがこの地上におられた間、聖霊は、特別な意味で、イエスに内住しておられた。イエスは、御父のもとに行かれた時、聖霊がご自身を満たしていたように、ご自身に従う者をも満たすように、と聖霊を送り返されたのである。聖霊によって、イエスのうちに生ぜしめられていた生活は、イエスに従う者たちのうちにおいても——イエスがされたように、彼らが御霊により頼んだ時——生ぜしめられたのである。

このことは、クリスチャン生活を、実にすばらしい可能性を持ったものとする。もし私が、私自身の力で、あるいは、聖霊の御力を幾分交えて、イエスのような生活をしなければならぬと

考えているとすれば、私は、それを始めない先に、失望してしまうことになるだろう。しかし、それが、この地上における神のご計画でないことを知るのは、すばらしいことである。

イエスの誘惑

イエスは私たちに、御霊によって歩むことについての、すばらしいパターンをお与えになった。ルカの福音書四章二—三節には、聖霊が、イエスを悪魔のこころみに会わせるために、荒野に導いたことが記されている。

「その間何も食はず、その時が終わると、空腹を覚えられた。そこで、悪魔はイエスに言った。『あなたが神の子なら、この石に、パンになれと言いつけなさい。』」

ここに、サタンのこうかつな戦術の一つが見られる。すなわち、どんなに、彼が、私たちの生活環境を利用して、罪を犯させようとするかがわかるのである。サタンは、戦術にかけては名人である。彼は、私たちの弱さのパターンを知っている。イエスは、四十日間、何も食べておられなかった。そして、空腹を覚えておられたのである。悪魔は、ひやかすような語調で、「あなたが神の子なら、この石に、パンになれと言いつけなさい」と言った。

あなたは、サタンが、この人は神の子であるということを知っていた、と思わないだろうか。もちろん、彼は知っていたのである。サタンは、ほかではない。もしサタンが、イエ

スが神の子であられたことを信じていなかったなら、イエスを誘惑しようとして、時間を空費することはしなかったであろう。

実際には、サタンは次のように言ったのである。「さあ、イエス、あなたは全能の神の子なのだから、どうして、ちょっとしたランチをつくらないのだ。これらの石を、パンにしないのだ。」
事実、この誘惑は、キリストの神性の、偉大な証拠である。私たちが、四十日四十夜、何も食べなかったでしょう。そして、悪魔が私たちのところへやって来て、「あなたは、神の子ともなのだから、なぜ、これらの石をパンにしないのだ」と言ったでしょう。このようなことは、私たちにとっては、誘惑にならないだろう。——なぜなら、私たちは、それをする事ができないからである。

イエスの場合には、指をばちんとはじかれるだけで、ただちに、かん木の茂みがロールパンでいっぱいになったことであろう。

サタンのほんとうの目的

サタンの邪悪な計画が、わかるだろうか。イエスは、ご自身の必要の供給に関して、聖霊に全面的に信頼して生きる事——それは、すべての人がしなければならぬことであるが——をやめ、これらの必要を満たすため、ご自身の神性を用いるように誘惑されたのである。サタンは、

イエスが神であられると共に、また、人であられること、そして、この地上にいる間は決して、ご自身の神的な力を用いないという道を選ばれたことを知っていた。イエスを誘惑して、父なる神のみこころに背かせ、ご自身の必要を満たすために、ご自身の神性を用いさせることができるなら、サタンは、どのような犠牲をもいとわなかったであろう。

イエスは、サタンの申し出を、きっぱりと拒否された。そして、父なる神が、聖霊を通して、彼をささえられるのに任されたのである。イエスがこのようになされた一つの理由は、あなたが、そして私が、従うためのパターンを持つようになること、そして、私たちが、私たちのあらゆる必要を満たしてくださるすばらしい、力強い神を持っていることを知るようになることであったのである。

彼は、この世やサタンが持ち出してくるご自身に対するあらゆる侮蔑に耐えられた。彼は、人間として、聖霊——私たちに内住しておられるその同じ聖霊——の力づけと御力により頼みつつ、それをされたのである。

キリストの歩み、私たちの模範

キリストの全生涯は、御霊によって彼のうちに働いておられる父なる神により頼んで過された。彼は、ご自身が直面するあらゆる状況を、彼の人間性を通してそれを処理される父なる神の

能力に結びつけられた。彼は、それらのいずれをも、ご自身の神的な力によって処理することがおできになったことであろう。しかし、彼は、私たちに模範を残したいと思っておられたので、そのようなことはされなかった。

ヨハネは、イエス「神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません」(ヨハネ二・六)、と言った。

イエス・キリストは、父なる神に注目しつつ、歩まれた。そして、父なる神は、彼に内住している聖霊により、彼を通して働かれたのである。

私たちは、イエスに注目しつつ歩むべきである。そうすれば、彼は、私たちに内住している同じ聖霊によって、私たちを通して働いてくださるであろう。

聖霊に満たされよ

この生活のパターンは、エペソ人への手紙五章一八節において、「御霊の満たし」と呼ばれている。そこには、次のように記されているのである。「また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」

「御霊に満たされなさい」というクリスチャンひとりひとりに対する命令の、「満たされなさい」という部分は、原語のギリシヤ語においては、動詞で、継続的に御霊に満たされることを意

味する。それは、信者の生涯における瞬間瞬間の経験でなければならない。

多くの人々は、御霊に満たされることは、頭のふたをあけ、いっぱいになるまで聖霊を注ぎ込むことだと考えている。しかし、そうではない。あなたが、これまで以上に、聖霊を獲得するのではなく、聖霊が、これまで以上にあなたを獲得されるのである。

それなら、御霊に満たされることは、正確には、どのようなことを意味しているのだろうか。

パウロは、エペソ人への手紙五章一八節において、すぐれた例証を用いている。そこでは、彼は、御霊の満たしを酒に酔う経験と比較している。あなたが酒に酔うことは、他の力が、あなたの頭を占領し、あなたの人格を支配していることを意味する。あなたは、自ら進んで、あなたの生活の支配をアルコールにゆだねたのである。

パウロが、すべてのクリスチャンに、御霊に満たされよと命ずる時、彼が意味しているのは、自発的に、あなた自身に対する支配を、他のおかた——聖霊——にゆだねることである。あなたの人格の上に、聖霊からの力をいただいてほしい。

私たちは、どのようにしてこれを行うことができるか

私たちは、まず第一に、キリストを受け入れた瞬間、聖霊が私たちのうちに永住されることを知らなければならない。ローマ人への手紙八章九節には、あなたのうちに聖霊を持っていないこ

とは、あなたがクリスチャンでないのと同じことであるという意味のことが記されている。私たちのうちに内住しておられる聖霊は、御父および御子と同質であられ、永遠に共存されるおたである。

第二に、私たちは、△罪は、聖霊を悲しませるが、聖霊を私たちから去らせはしない▽ということを知らなければならない(エペソ四・三〇)。イエスは、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない」(ヘブル一三・五)と約束された。

私た [redacted] き第三のことは、△聖霊が、私たちに内住されること、私たちを満たし、あるいは支配されることは、全く別である▽ということである。

神は、私たちが絶えず御霊に満たされていることを、望んでおられる。このことを私たちの上に実現する唯一の道は、だれが私たちの生活における主人かを決定することである。私たちは、私たちの生活における権利証を神にお与えする、一度かぎりの決断をする必要がある。このことは、私たちが、常に神のみこころを行おうとしていることを意味しない。それは、私たちが、人生において、神がキリストにおいて私たちのためになしてくださったことを、まじめに評価するような段階にきたことを意味するのである。私たちは、次のように論断する。すなわち、もし神が、私たちに永遠のいのちを与え、私たちをご自身の永遠の家族の中に入れ、私たちをキリストとの共同相続人とし、私たちを永遠に王とし、祭司としてくださっているなら、私たちは、「私は、

そのような神に信頼することができる。もし私がこの生涯を全面的に神にゆだねるなら、神は、それをどのように取り扱うべきかを知っておられ、それを最善に用いてくださる」と、確信をもって言うことができる論断するのである。

あなたのからだを神にささげよ

私たちがこのような点にまで到達した時——そして、私たちのうちのある者にとっては、そのような点に到達するのは、霊的に最低のところまで行った後であるが——私たちは、ほんとうの意味において、使徒パウロの「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です」(ローマ一二・一)ということばを味得することができるのである。

パウロがここで用いる、「ささげる」ということばは、原語のギリシャ語では不定過去で、「一度かぎりささげることを意味する。それは、幾度もくり返してする必要のないものである。

あなたは、ひよっとすると、あなたのクリスチャン生活において、「もうだめだ。問題が次から次へと起ってくる。私は、人生を正しく歩むことができない。ああ、疲れた。あきらめるよりほかない」という点に、行きあたっているかもしれない。

神が、情緒的に、そして心理的に私をつくりなおしてくださったことがわかった。彼は、私の人生におけるどうしようもない事態を取り上げて、それを、ご自身の栄光とし、私の益としてくださったのである。

その日から、私は御霊にあって歩むとはどのようなことであるかを、経験し始めた。私には、神が、情緒的に、そして心理的に私をつくりなおしてくださったことがわかった。彼は、私の人生におけるどうしようもない事態を取り上げて、それを、ご自身の栄光とし、私の益としてくださったのである。

これは、……御霊のことを言われたのである。」

その日から、私は御霊にあって歩むとはどのようなことであるかを、経験し始めた。私には、神が、情緒的に、そして心理的に私をつくりなおしてくださったことがわかった。彼は、私の人生におけるどうしようもない事態を取り上げて、それを、ご自身の栄光とし、私の益としてくださったのである。

あった。たとえば、あかし、聖書研究、祈り、罪の告白などである。しかし、それらのうち一つとして、永続的な助けになるものはなかったのである。

ついに、ある日、ドライブしていた時、私は必死になって神に私の問題の解決を願い求めた。神は、次のように言われたよ。

「子よ、あくせくするのをやめなさい。あなたの生涯を、今、私に、明け渡しなさい。そうすれば、あなたは、これから先どうしようかと頭を痛めることはないでしょう。」

どのようなことが起ったかを、私は知らない。ただ知っているのは、あくせくするのをやめて、無条件に私自身を神に明け渡したことである。神の平安が、私のたましいにあふれた。私は、非常な重荷が私から取り去られ、ヨハネの福音書七章三八—三九節のみことばが、生ける現実となるのを感じたのである。『……その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。』

これは、……御霊のことを言われたのである。」

その日から、私は御霊にあって歩むとはどのようなことであるかを、経験し始めた。私には、

神が、情緒的に、そして心理的に私をつくりなおしてくださったことがわかった。彼は、私の人生におけるどうしようもない事態を取り上げて、それを、ご自身の栄光とし、私の益としてくだ

私を信じてほしい。それは、クリスチャンとしての偉大な転換点なのである。あなたが、霊的に、最低のところに到達した時、あなたは、向上する以外に道がない。神は、私たちが勝利の生活をしようにとして、あらゆる策略を出し尽すのを待っておられる。私たちが、ついに力尽きてロープにもたれかかっている時、彼はやって来て、「さあ、タオルを投げ入れて、私にゆだねませんか」と言われるのである（訳注：タオルを投げ入れるのはボクシングにおける降参のしるし）。

私も、自分自身の力でこのことをやろうと決心していたことがあった。それは、私が信者になってからすでに数年を経っていた時で、私は、一生懸命に神のために労していた。最初容易に思われたものがしばらくすると、つらい仕事になってきた。私は、霊的に、ジェット・コースターに乗っているようで、クリスチャン生活は、私にとって、興味のないやなものになってしまっていたのである。

何とかしてもそのような状態にもどろうとして、私は、いろいろな人の、どのようにすれば勝利のクリスチャンになれるかについての忠告を実行し始めた。私は、すべての悪習を捨て去ろうとしたが、その中のあるものは、私にしっかりとくっついていて、どうしても離れなかった。ある友人は、私に、聖句を暗記することを勧めた。私は、それも実行してみたが、求めているような結果を得ることはできなかった。

私は、次々と、いろいろな手段を試みた。それらの大部分は、それ自体としては、よいもので

未来を手のうちに握っておられるかを知る

その時以来、自分は、未来がどのようなかを知らない。しかし、私の未来を手のうちに握っておられるかを知っているVという態度を、取り続けている。

これは、私たちが、常に御霊に満たされている生活をしようとするなら、神が私たちに望んでおられる態度である。しかし、あなたに警告したいことは、あなたが、あなたの生涯を、このように神に明け渡すにあたっては、心からそれをせよ。なぜなら、神は、真剣にそれを受け取られるのだからVということである。あなたは、次のように言うだろう。「主よ、私は、あなたのみこころを望みます。たとえ、今、私にそれがどのようなものであるかわからなくても。」

あなたが、このような親密な仕方では神を知るにつれて、あなたは、自分が危険な取り引きをしたのではなかったことを発見するだろう。あなたに対する神のみこころは、あなたのどのような夢をも、はるかに越えたものである。神が待っておられるのは、ご自身がそのすばらしい計画と目的を記入することのできる、あなたからの白紙委任状である。

私が、「主よ、万事もうまくいっています。しかし、私は、しばらくの間、私の人生を自分でやってみたいのです」と言っていた時があった。しかし、私が実際にやってみるとだめであった。すると、主は、私の手綱を引き締めて、「それごらん、うまくいかないだろう」と言われるので

ある。

時には、主が、私の行こうとする方向とは別の方向へ引っぱって行かれるので、涙を流したこともある。しかし、私は、私の手綱を取る権利を主にお任せしたことを後悔したことは一度もない。

神は、あなたがあなたの人生における主人を決定することを望んでおられる。あなたがイエス・キリストを受け入れる時、あなたは永遠のいのちを受け、神の家族のメンバーとなるのである。その後、彼は、あなたの人生の権利証をご自身のもとに差し出すように要請されるが、それを強制することはされない。しかし、それをするとは意義のあることである。結局のところ、原子、分子を組み合せてあなたをおつくりになったおかた以上に、どのようにあなたを歩ませるべきかについて精通しておられる者がいるだろうか。

「この世と調子を合わせてはいけません」(ローマ二・二)

パウロの「この世」ということは、どのような意味であろうか。彼は、神を除外した、この世間的な思考と行動のシステムのことを言っているのである。私は、J・B・フィリップスによる、この個所の次のような現代語訳を好む。「あなたがたの周囲の世俗性があなたがたを圧縮して世俗の型にはめようとするのを許してはなりません。神に、あなたがたの思いを、内側から改

変えて、神に調子を合わせることは、あなたがたの人生にとって、神に調子を合わせることは、あなたがたの人生にとって、神に調子を合わせることは、あなたがたの人生にとって、

造してもらいなさい」(ローマ二・二)。

私たちが、この世の型にはまるのを避ける唯一の道は、私たちが神に、自分自身を差し出して、「ここに、私の人生があります。神よ、あなたが、それを運用してください。私に新たな知力を与えることにより、また私が、あなたと私自身、そしてこの世について、新たな見解を持つことができるようにすることによって、私を内側からつくりなおしてください」と言いうる点にまで至ることである。

もし、私たちが、信仰により、神がこのことをしてくださることを疑わず、神が、聖霊により、私たちを支配し、満たしてくださることを日ごとに期待しつつ生きるなら、神は、それをしてくださるであろう。

あなたは、御霊に満たされるために、何らかのこうこつとした、情緒的な経験を持つ必要はない。あなたが御霊に満たされていることを示す、何らかの神秘的な力によって、興奮させられる必要もない。

神は、それよりも更にまさった計画を持っておられる。もし私たちをご自身にゆだねるならば、私たちが人生において瞬間瞬間、遭遇する状況を処理してくださることを約束しておられる。神は、恐れ、臆病、敵意、思いつく、高慢、情欲、ねたみ、その他の私たちが処理しえない情緒を克服することがおできになる。神が私たちに望んでおられるのは、私たちが問題から手を引

いて、神にそれをお任せすることだけなのである。

そして、神は、私たちからどのような助けをも求めておられない。神は、問題のすべてを、私たちのために、そして、私たちを通して処理してくださるか、あるいは、私たちにすべてを処理させるかのどちらかなのである。神に助けを求めたというだけで、神に恩をきせるようなことをしないでほしい。神は、みずから助ける者を、助けはしないのである。それとは反対に、神は、自分が無力であることを認めている者を、助けてくださる。それは、この世の考え方に反するものである。しかし、それは、神の行動の計画なのである。

私は、初めて、多くの人々の前で演説しようとした時のことを覚えている。それは、大学の演説のコースの時であった。私は、クラスの皆の前に立って、どぎまぎするばかりであった。ついに私は、「やめたー」と言って、くると背を向けて歩き去った。それが、私の演説の練習の終りだったのである。

私がクリスチャンになってから二、三年たったある日曜日、教会で、成人の日曜学校のクラスを教えるように依頼された。それは、私にとって、気が遠くなるようなことであったが、私は、その時まで、御霊によって歩むという原則を学んでいた。それで、この際、その原則がうまくいくかどうかやってみようと思った。その朝、私は、クラスの人々の前に立ち、文字通り、聖霊に明け渡した私の声帯を通して、メッセージしていただいたのである。それは大成功であった。

しかし、それは、私のいさおしではない。神が、初めから終りまで、すべてをしてくださったのである。

御霊によって歩む

時々、私たちは、どのようなクリスチャン生活を送ればよいかについていさか当惑することがある。まず第一に、あなたは、あなたは、御霊に満たされなければならない。そうすることによって、あなたの必要とする力が与えられる」と記されているのを読む。それから、だれかがやって来て、御霊によって歩むことについて語り、そうすることによってあなたが罪を犯さないように守られると言う。また、他の人は、信仰によって歩むことが、勝利のクリスチャン生活を送る秘訣であることを見出している。今日では、多くの人々が、人生における誘惑を克服するためには、聖霊のバプテスマを受けなければならないと主張する。

いったい、どの方式がよいのだろう。私たちのクリスチャン生活において、人生の方向を変え、生き方を変えてしまうような、聖霊との特別な出会いを経験する時点が果たしてあるだろうか。

神のことばである聖書が、このことについてどのように教えているか、感じているままに話しましょう。「御霊に満たされなさい」(エペソ五・一八)、「御霊によって歩みなさい」(ガラテヤ五・一六)、「信仰によって歩みなさい」(Ⅱコリント五・七、ヘブル一・一章)というパウロの信者に対す

る勧めは、すべて、信仰者は、神のために、生きることができない」という同じ原則に言及しているのである。信者は、聖霊が彼のうちにおいて、そして、彼を通して、クリスチャン生活をしてくださることに信頼しなければならぬのである。

多くのクリスチャンにとって、聖霊がクリスチャン生活することを望んでおられ、かつ、聖霊はそれをおこなうことができるということを悟るのは、この上なく歓迎すべきことである。それで、彼らが敗北の代りに勝利を経験し始めると、彼らは文字通り圧倒されてしまうのである。

多くの人々にとって、このような御霊に満たされた生活に入るのは、危機的な経験である。もし幾年もの間、あなたが、クリスチャン生活において敗北の中にのたうちまわっており、突然、内住のキリストがあなたにとってすばらしく生き生きとしたものになるなら、有頂天になるかもしれない。

しかし、神は、ご自身の力を、ごく短期間私たちに現すことを望んでおられない。神は、私たちに、ご自身が私たちを瞬間瞬間新しいいのちと霊的なエネルギーをもって満たすような、新しい生活のボタンを与えることを願っておられる。全く新しい生涯をもたらさないような聖霊との出会いは、どのようなものであれ、新約聖書の教えている御霊による歩み、御霊による満たしではない。

聖霊のバプテスマ

聖霊のバプテスマについては、新約聖書に幾度も述べられているが、それが定義されているのは、ただ一度である。「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです」(エペソ二・一二)。同一の聖霊を受け、同じことをする。

この箇所は、△聖霊のバプテスマとは、私たちがキリストおよび彼のからだなる教会との生ける結合にもたらす、聖霊の特別な働きである▽ということを、単純に告げているのである。このことは、イエス・キリストを救い主として信ずる瞬間、どの人にも起るのである。

聖霊のバプテスマは、信者に彼の日ごとの生活における力を与えることを意図した、聖霊の働きではない。それは、御霊の満たしのお働きである。御霊による歩み、御霊の満たし、信仰による歩みは、同じ意味のことばである。

新約の手紙の中で、私たちが聖霊のバプテスマを受けることを命ぜられている箇所は、一つもない。もしそれが、クリスチャン生活において力を得る手段であるなら、パウロの教えはそれで満ちていることだろう。

聖霊のバプテスマは、確かに、聖書の教えである。しかし、それは、注意深く、すべての新約

聖書のみことばと関連させられなければならない。

サタンの領域

当然のことであるが、サタンは、信者が御霊に満たされた生活を見出し、御霊によって歩み始める時激怒する。この新しい領域において生き始めるクリスチャンは、自分自身がサタンのあからさまな敵意にさらされていることを見出すだろう。そして、その敵意は、時には、圧倒的であることがある。幾年にもわたって眠っていた私たちの古い罪深い生活が私たちを悩まし始める。

なぜか。霊的な領域に住んでいるのは、聖霊のみではないからである。サタンもそこに住んでいる。そして、私たちは、サタンの本拠へ侵入し始める時、敵の領土内にいるのである。

御霊に満たされることなしに、そして、御霊の武器をまとうことなしに、この戦場へ入って行くのは全くばかげている。サタンは、私たちを、散々にやつつけてしまうことであろう。忘れてはいけない。サタンは、幾千年にもわたって神の子らを混乱させているのである。私たちは、とうていサタンの敵ではありえない。

しかし、神はほむべきかな。イエスがおられる！ 私たちが御霊によって歩む時、私たちは、肉の欲望を満足させることはない。それは、パウロが、ガラテヤ人への手紙五章一六節において約束したことであって、彼が、他の箇所ですべているのと同じである。「私たちは、私たちが愛

してくださったかたによって、大勝利者なのです△大勝利を得るのです▽」(ローマ八・三七 詳訳聖書)。

もし、御霊の満たしが、あなたのクリスチャン生活においてあなたがまさに必要としているものと思われるなら、なぜ、今、聖霊にあなたの生活を支配していただく決心をしないのか。彼は、喜んでそれをしてくださる。そして、たとえどんなに小さな信仰であってもあなたの信仰に答え、あなたのうちに、そしてあなたを通して、イエスの生涯を再現することが確かにおできになるのである。

神の御力を妨げる

もし私たちが信仰によって歩まないなら、どのようなことが私たちに起るであろうか。パウロは、「信仰から出ていないことは、みな罪です」(ローマ一四・二三)と言っている。

もし私たちが御霊に従って歩んでいないなら、私たちは肉に従って歩んでいるのである。そして、それは罪である(ローマ八・四―五)。それは、私たちが、私たち自身の人間的な知恵で、自分の生活や問題を処理しようとしていることを意味する。私たちは、五感の世界に住んでおり、私たちが感じていること、見ていること、考えていることは真実であると結論している。そして、問題を、それを処理してくださる神の知恵と能力に関連させることをしないのである。

もし私たちが肉のエネルギーによって歩んでいるなら、私たちが、Aクラスの罪責の旅に出かけるか、あるいは罪の症候群にとらえられる可能性が、極めて大きい。私たちは、知りながら肉に従って歩み、同時に、聖霊により頼んで歩むことはできない。

私たちが、私たちが誘惑から救い出してくださる聖霊に信頼することをやめ、それらの誘惑を私たち自身で処理しようとする時、霊的に完全な失敗に終ることは確かである。肉の活動の不可避的な結果は、罪である。そして、罪は、信者の生活における神の御力を妨げるのである。

神が、私たちを愛し、私たちを受け入れているのをやめられるのではない。ただ、私たちが、そのような神の愛、神の受け入れを信ずるのをやめるだけである。そして、私たちの注意は、問題の解決者であられる神を離れて、問題——私たち——に向けられるのである。

◎神の子どもが、このような生き方のむなしさを認め、彼が肉に従って歩んでいたことを神に承認する瞬間、彼は、彼自身の思いにおいて、神との交わりに回復される。神は決して、彼と「交わる」ことを、やめておられなかったのである。彼が、神と交わることをやめていたのである。

世、肉、悪魔におびえてはならない。私たちが、御霊によって歩み、神の武器によって完全に武装する時、私たちは、これらの三つに対して勝利者となるのである。

武具に注意しよう

「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい」
(ヘブ六・一二)。

悪魔は、私たちの性格上の特質、肉の欲、生れつきの肉体的な衝動を利用して、陰謀をめぐらしている。

私が、メッセージの準備をしたり、研究をしたりする時があつて、資料を集め、書齋にこもると、前に述べた三つのものが私を攻撃し始める。私は、空腹に襲われる。私は、空腹を感じるはずがないことを知っている。朝食をとってから、一時間もたっていないからである。しかし、口実を設けて、神のことばである聖書から離れるのである。

私は、いつも、「引き下げ、サタン」と言うことができたかと願っている。しかし私は、それをしない。私は、あちこちをうろつきまわり、何かをとって食べ、知らず知らずのうちに、一時間——貴重な一時間——をむだにしてしまうのである。私には、その食物は、ほんとうは必要ではない。しかし、サタンは、どのような生れつきのままの衝動をも——もしこれらの衝動が聖書によってコントロールされていないならば——用いることができるのである。

サタンが用いるもう一つの衝動は、私たちの生れつきの性欲である。あなたが、ひとたび結婚

するなら、その必要は一応満たされたと言えるだろう。しかし、たとえ結婚しても、性欲が抑制されない場合がある。サタンはその衝動を用いて、結婚を解消させ、あるいは、夫婦間に激しい敵意を生じさせて、コミュニケーションを全く打ちこわしてしまうこともある。またサタンは、夫をして、自分の性欲を満足させることにみに専念させ、妻の情緒的な必要を全く顧みないようにさせることもある。

サタンが、若い人たちに対して用いるもう一つの生れつきの衝動は、配偶者を求める衝動である。女性はこの領域において特に弱点を持っている。彼女たちが、配偶者の必要を覚え、この領域において主に信頼していないならば、サタンは、やって来て、彼女たちを夫がしに熱中させ、その結果、絶望に陥れるのである。

私は、多くの立派なクリスチャンが、正しい配偶者を主が与えてくださることに信頼していないか、たばかりに、やっかいな事態に陥る実例を見てきた。サタンは、彼らをしっかりと手中に握っている。ある場合、彼らは性的な関係を持つことすらあえてしている。なぜなら、そうすること、ボーイ・フレンドやガール・フレンドを確保する唯一の道であると感じているからである。他の人々は、主が配偶者を与えてくださることに信頼しないで、間違った相手と結婚している。彼らは、未婚者と結婚したり、肉的なクリスチャンと結婚したりしているのである。サタンは、これらの自然な必要を——それらの必要が御霊の支配下でない場合に——用いる。

それゆえ、私たちは神の武具を必要としているのである。

「私たちの格闘は血肉に対するものではなく……」(エペソ六・一二)
これらの衝動が抑制できなくなった時、その背後にあるものは何であろうか。私たち自身の肉、あるいは罪の性質が、私たちのうちで満足を求めて騒ぎ始める。すると、「主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもう一つの悪霊」(エペソ六・一二)も共にやって来て、変態的な欲求をもって、私たちの肉を力づけるのである。

サタンは、絶えず注意して信者ひとりひとりを見守っている。そして、信者のつけている武具が少しでもずり落ちると、その間隙に、彼の火矢を放とうとするのである。

「ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい」(エペソ六・一二)。

帯

使徒パウロは、このエペソ人への手紙を書いた時、ローマ軍の兵士たちによって、数か月間厳重に監視されていたのである。それで、彼には、兵士たちの武具をごく近いところから観察する機会があったに相違ないと思われる。

「では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け……」(エ

ペソ六・一四)。

ローマの軍隊は、当時の古代世界における最もすぐれた武具を持っていた。そして、パウロはそれを、クリスチャンがサタンに対して用いるべき神の武具の例証として用いたのである。

ローマのよいでは、十五センチから二十センチぐらいの幅の帯を、腰の回りにしていた。帯は最も重要なものの一つであった。なぜなら、他のすべてのものは、その帯に連結されていたからである。もし帯があるべきところがないと、よいい全体がしっかりとしなくなるであろう。

パウロは、クリスチャンの基礎となるべき武具は、真理——聖書の理解とその人生への適用についての知識——であると言っているのである。神は、私たちが、サタンの策略に対する防御の武具を持つことを望んでおられる。兵士は、戦闘に参加してから武具をつけるのではなく、戦闘のための備えとして武具をつけるのである。真理の帯は、しっかりとしたものでなければならぬ。さもないと、他のすべてのものは放れ落ちてしまうであろう。

胸当て

7 戦いの武器

ローマの武具の中には、堅い皮で裏張りされた青銅製の胸当てがあった。これは、からだの最も重要な部分の一つ——心臓——を保護していたのである。

私たちの心をサタンの攻撃から守る胸当ては、正義である。これは、キリストの義のことを言

う。パウロは、彼のコリント人への手紙第二において、キリストが、私たちのために、どのようなことをしてくださったかを述べている。「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです」(Ⅱコリント五・二一)。

これは、私たちの義について語っているのではない。私たちがイエス・キリストを信ずる時、彼の義が与えられる。私たちは、すべての私たちの罪をゆるされるのみでなく、また、キリストの義を着せられるのである。その時から、私たちの、神との関係に関するかぎり、私たちをキリストと同様に義なるものとして見てくださるのである。

サタンが好んでするのは、私たちが神の期待に背いた時、やって来て、「あはは、おまえはもう、神に受け入れられないよ。おまえがどんなことをしたか、考えてみるよ!」と言うことである。そのような時、もし私たちが正義の胸当てをつけているなら、私たちは、「去れ、サタン。神は、私の義を見ておられるのではない。また、私の義を見られたことは決してなかった。私が、神に受け入れられているのは、キリストの義のゆえなのだ。そして、キリストの義は不変である」と言うことができるのである。

くつ

「足には平和の福音の備えをはきなさい」(エペソ六・一五)。

敵と格闘したことのある者ならだれでも、確かな足もとが最も重要であることを知っているだろう。私はかつて、ボクシングをやったことがあるが、すべらないようにくつの裏に樹脂をぬっていたことを覚えていいる。一度ならず私は、パンチを加えようとした時、足もとがくるって、床に倒れた経験があるからである。ローマの軍隊におけるように、剣をもって戦う場合には、足もとがくるうことは死を意味することがある。当時の軍隊のくつは、びょうくぎを打ちつけたサンダルであった。彼らが白兵戦をしていた時、彼らの足はしっかりと地に立っていた。彼らの足もとは確かだったのである。

クリスチャン生活においても、サタンに抵抗する場合、確かな足もとを必要とする。その確かな足もとは、平和の福音によって備えられるのである。これは、救いの福音と同一のものではない。「福音」は、「よいニュース」を意味する。そして、私たちがイエス・キリストを信ずることによってゆるされるのは、確かにすばらしいニュースである。しかし、私たちにあって、それよりも更にすばらしいニュースがある。クリスチャンひとりひとりにあって、安息の場所と心の平和がある。それは、信者ひとりひとりにとってのイエス・キリストにある神の隠れ場である。ヘブル人への手紙四章は、神の安息に入ることについて語っている。それは、今ここにある安息である。「やがて与えられるすばらしい経験」ではない。それが、よいニュースなのである!

神は、イエス・キリストにおいて、信者ひとりひとりのための、心の平和と安息の場所を備え

ておられる。もし私たちが、平和を得るためにどのように神の約束により頼むかを学んでいないなら、サタンの策略に対抗するための確かな足もとを持っていないのである。サタンは、私たちが知らないうちに、私たちのバランスをくずし、私たちを地面に打ち倒してしまうであろう。

サタンは、私たちのバランスをくずすために、心配、不安、緊張を用いる。平和の福音は、神の約束をもって心配事に対処するものである。

あなたは恐れているか。それならば、次の約束を要求せよ。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(イザヤ四一・一〇)。

あなたは、あなたの必要のゆえに、心を悩ましているか。請求書が山積しているか。商取引き上のやっかいな問題が、次々と押し寄せてきているか。子どもたちや両親が、処理できそうもない難問題を持ち出しているか。次の約束に注目し、それを要求せよ。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」(ペリピ四・六―七)。

これらの約束は、真実な約束である。神が私たちに恐れよと言っておられる少数の事柄のうちの一つは、私たちが神の約束を要求するのを怠ることなのである(ヘブル四・一)。

朝起きる時、私たちは、自分の武器を点検すべきである。真理の帯を締めているか。正義の胸当てをつけているか。行動を伴う神との関係に入ることを始めているか。私たちのよい行い、教会の奉仕、慈善事業への寄付といったような、功績のバッジを集めているようなことはないか。もしサタンが、そのような事に誘い込むなら、私たちは、致命的な打撃を受けるのである。あなたが、神の約束に憩っているかどうかを確かめよ。

大盾

「これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます」(エペソ六・一六)。

ローマの兵士の大盾は、幅約六十センチ、長さ約一メートル二十センチであった。兵士たちは、それを用いて敵の攻撃を受け流したり、敵の射手が矢を射かける時、その背後に隠れたりした。また、敵が火矢を放つ時には、周囲に盾のへいを築き、その中にうずくまることもできた。

サタンは、常に火矢を放っている。彼は、常に私たちのうちに、罪責や何らかの非難の種を作り出そうとしている。もしあなたが、あなたを保護する信仰の大盾を持っているなら、すなわち、キリストがあなたの必要を満たして余りある、という事実を単純に無条件に信じているなら、あなたは、そこに適切な守りを持っているのである。

「救いのかぶとをかぶり……」(エペソ六・一七)。

かぶとは、もちろん、頭——致命的な打撃から守られる必要のある、もう一つの部分——を保護していたものである。これは、現代においてもそうであるように、ローマの武具の中でも重要な部分をなしていた。

サタンは、神のことばである聖書を曲解することを好む。サタンは、イエスに対してもそうした。イエスが荒野において試みを受けられた時、彼は、くり返しサタンに、「……と書いてある」と言われた。サタンは、イエスに対する試みにおいて、みことばを引用した。サタンは、聖書を暗記している。彼は、みことばにかけては門外漢ではない。もし彼が、みことばに立っているクリスチャンを見るなら、みことばをゆがめようとするだろう。そのような時にこそ、私たちは救いのかぶとを必要とするのである。

救いを失ってしまった——永遠のいのちは、もう、自分たちのものではない——と、自分勝手に決め込んで精神病の一手手前にある多くの人々に、私は会った。彼らは、自分たちが、ある恐ろしい罪を犯してしまったと信じている。そして、敵がやって来て、「おまえは、ゆるされることのない罪を犯してしまった」「おまえは、罪を犯してしまった。神は、今度は、おまえの罪を

ゆるさないだろう」と言うのである。彼らは、このようにして、罪責の旅に出て行く。

救いのかぶとをかぶることによって、あなたの救いが絶対的に確実で、完全なものであることがわかる。ひとたびあなたがイエス・キリストを信ずるなら、あなたは、あなたの罪——過去、現在、未来の罪——をゆるされているのである。ひとたび、あなたがイエス・キリストを信ずるなら、あなたはその家族から除外されることは決してない。「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。わたしと父とは一つ(同一の本質)です」(ヨハネ一〇・二八—三〇欄外注)。

しかし、サタンは、あるあいまいな聖句を取り上げて、聖書のそれ以外の部分における明確な教えを完全にくつがえし、あなたに救いを失ったと思わせようとする。彼は、これらの聖句の幾つかを取り上げ、それらを曲解することにより、ローマ人への手紙全体の教え——救いは信仰のみによる、一度かぎりのものであることをはっきりと宣言している教え——を、くつがえそうとするのである。

救いは、行いによるのではない。これまでも、決して行いによるのではなかったし、これから先もそうである。救いは、キリストが私たちのためにしてくださった事柄に依存している。もし

あなたが、そのかぶと、換言すれば救いの確信を持っていないなら、生ける強い信仰を持つことはできないのである。

剣

「また御霊の与える剣である、神のことは受け取りなさい」(エペソ六・一七)。

剣は、攻撃のための武器です。ローマ人の剣は、昔の戦いにおいては現代の原子爆弾に相当するものであった。その剣は、刃の長さ約六十センチ、鋭い両刃で先がとがっていた。

この剣のデザインは重要であった。熟練したローマ軍の兵士は、どのような姿勢でも、突いたり切ったりすることができた。それで、決してバランスをくずすことがなかったのである。もっと大きな剣を持った敵の兵士は、それを振り回すためには、ある姿勢を取らなければならなかった。ローマ軍の兵士は、ひらりと身をかわして敵にバランスを失わせ、敵が体勢を立てなおして攻撃を加えてくる前に、やつつけたのである。

神のことばも、それと同じである。それは、「生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭い」(ヘブル四・一二)のである。

聖霊は、私たちに聖書を教え、私たちがサタンの誘惑に対抗して聖書を用いるのを助けてくださる。私たちが、その聖霊に信頼している時、決して、サタンの攻撃によってバランスをくずす

ことはないのである。

サタンがイエスを試みた時(ルカ四章)、イエスは、それぞれの試みに関する神の見解を表明した聖句を引用された。私たちが学ぶべき模範として、イエスはどすばらしい模範はない。そうではないだろうか。だからこそ、私は、サタンに攻撃されていると感ずる時はいつでも、サタンに対し述べられた聖句を声高く引用するのである。

私は、この方法を初めて実行した時のスリルを決して忘れないだろう。私は、その時、幾時間にもわたってある誘惑に悩まされ続けていたのである。どのような手段をもってしても、その誘惑を静めることはできなかった。私は、聖書の約束を要求し、聖霊により頼み、それを取り除いてくださるようにと主に祈り求めたが、どれもうまくいかなかった。

それから私は、イエスが試みの時にどのようにされたかを思い起した。それで私は、誘惑についての神の見解を直接に表明している聖句を探し出した。そして、少しばかりかかっていると思いながら、「サタンよ、とやかく言うな。ここに次のように書いてある」と言って、声高くその聖句を引用したのである。するとどうだろう！誘惑はなくなってしまったのである。——そして、サタンも、逃げ去ってしまった。

私は、これが「悪魔に立ち向かう」方法であると信じている。私たちがそのようにする時、神は「悪魔はあなたがたから逃げ去ります」(ヤコブ四・七)と約束しておられる。

信者は、神のみことばである聖書の中にある、戦いについての知識を必要とする。

祈り

「すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい」(エペソ六・一八)。

御霊の与える剣と祈りは、クリスチャンの攻撃のための武器である。ひとたび私たちがサタンを敗走させると、私たちは、これらの武器を用いて、その反撃を抑えることができる。しかし、忘れてならないことは、神が祈りに答えてくださるのは、私たちが神を信じているからであって、深遠な、長たらしい祈りのことばを神に浴びせかけるからではないということである。

点検のためのリスト

サタンの大攻勢が展開されている現状を考慮して、私たちは、自分の武器を点検し、常にそれをみがき、油をぬって、いつでも実戦に使えるようにしておく必要がある。もし私たちの剣が、みことばの研究をおろそかにしているためにさびているなら、それを、鋭くしておくほうがよい。もし私たちが自分の力で正しくあらうとしているために、私たちの胸当てがずり落ちているな

ら、それを調整しておかなければならない。もし私たちのかぶとが、救いについての私たちの確信の欠如のゆえに、ぬげてしまっているなら、神のことばである聖書を学ぶなり、聖書に精通している人の指導を受けるなりして、かぶとを正しくかぶるようすべきである。

私たちは、おもちゃの兵隊のようになることはできないし、あえてサタンとゲームをするようなことはしない。サタンは、彼のあらゆる武器を動員して、人々を右に左に捕えつつあるのである。

「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいたるもろもろの悪霊に対するものです」(エペソ六・一二)。

現代は、心霊現象の研究が盛んで、人々は、進んでサタンを礼拝している。そして、サタンは、自分の存在を信じない人々に対して陰險な策をろうしている。——事実、サタンは、彼らを、だましているのである。

もしあなたが、幸福そうに口笛をふいて人生を過したいと思うなら、そうしてもよいだろう。しかし、あなたが口笛を吹いている間も、あなたの武具が、きちんと整っているかどうか注意しなければならない。

兵士たちよ、武器庫に行け！

八 勝 利

あなたは、本書を不安の念をいだきながら読み始めただろうか。この本の題目は、好奇心をそそるもの、あるいは恐ろしいものであったろうか。

私たちに向けられた膨大なサタンの軍勢は、ある人々を圧倒してしまうかもしれない。サタンとその手下たちの現実と力、肉の不断の誘惑、この世の制度の不可思議な魅力——これらのものは、たやすく、私たちの注意をキリストの備えておられる勝利からそらし、他に転ぜしめることであろう。

このことほど、サタンを喜ばすことはない！

サタンの戦術は、常に人々をキリストにおける神のゆるしに対して盲目にすることであった。それが成功せず、人が、やみの王国から救い出されて、光の王国に生れるようになると、サタンはそのすべての努力を集中して、神が信者のためになしておられる日ごとの勝利の、奇蹟的な備えを知らせまいとする。

サタンは、世と肉のあらゆる悪賢い、陰險な策略を用いて、私たちの注意を、キリストからそ

らして、自分自身の問題に向けさせようとするだろう。

サタンは、私たちの生れつきのままの肉間的な弱さを誇張し、神に対し、また人に対して劣等感をいだかせようとするだろう。そしてまた、私たちの自尊心をかき立て、私たちが他の人々から正当に評価されていないと思わせるだろう。彼はまた、キリストにある兄弟たちのうちに嫉妬心を起させ、兄弟たちを分裂させることだろう。サタンは、クリスチャンたちに教理的な論争をさせ、羽目をはずさせるのを好む。その結果、私たちは、私たちと見解を異にする真の兄弟たちを愛し、受け入れることを忘れてしまう。

もし私たち自身の弱さや罪のことばかり考えて多くの時を過すなら、私たちはやがて、失望落胆して敗北してしまうことだろう。

霊的近視

神は、この「霊的近視」が私たちの最大の問題となるだろうということを知っておられた。私は思う。だからこそイエスは、私たちが自身に注目せず私たち自身の環境に目を注ぐことの愚かさを、実例をもって教えるために、特に力を尽されたのだと。

マタイの福音書一四章二一—二三節には、イエスが、あらしの襲来を知っておられたにもかかわらず、わざと、弟子たちを舟に乗せて、ガリラヤ湖に送られたことが記されている。イエスは、

弟子たちが、長い間の漁師としての経験から、他の何ものにもまさって舟乗りとしての技術に自信を持っていたことを知っておられた。

⑤ あらしがやって来た。それは、彼らが経験したあのあらしよりも激しいものであった。そして、弟子たちは恐れおののいた。彼らの生涯において初めて、彼らは問題を処理するために、自分の能力により頼むことができなかったのである。

神は、ご自身の子らを、彼らが自分の人間的な能力に最も自信を持っている領域においてテストされる。それは、彼らが全面的に神により頼む必要があることを示すためなのである。

弟子たちが失望し始めた時、イエスは、湖の上を歩いて彼らのところへ来られた。ペテロは、大胆に、「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてこまで来い、とお命じになってください」と言った。ペテロは、人もしイエスが、彼に、水の上を歩いてご自身のもとまで来いとお命じになったとしたら、イエスは、なんとかそれをなしとげる力を彼に与えてくださるであらう。Vということを信ずるだけの信仰を持っていたのである。

この時点において、ペテロは水の上を歩く自分の能力には全く自信がなかった。しかし、彼はイエスを信頼していたのである。彼は、自分の持っているわずかな信仰を正しい対象に向けたのである。

これは、記憶しておくべき重要な原則である。キリストは、どのようなことであれ、私たちに

お命じになったことについては、それをする能力をも与えてくださったのである。「神は、みことろのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです」(ピリピ二・13)。

ペテロは、非常に用心深く、舟からあらしの湖へ第一歩をふみ出した。彼は、信頼の目を、イエスと奇蹟的に彼を支えてくださるイエスの能力とに注いで、実際に水の上を歩いてイエスのおられる方へ進んでいた。

すべてはうまくいっていた。ところが、彼は風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください」と言ったのである。

ペテロの学んだ教訓

何が起ったのだろうか。ペテロは、彼自身があなたや私がしばしばやっていることをするまではうまくやっていた。ペテロは、問題を解決してくださるおかななるイエスから目を離して、問題——彼の場合においてはあらしの湖——に向けたのである。彼がそうした時、沈み始めた。主をほめよ。私たちは忠実さを欠いているが、それにもかかわらず、彼は、忠実であられる。彼は、沈む寸前のペテロをつかまれた。そして、それによってペテロが教訓を学ぶことができるようにされたのである。

この教訓は、ペテロだけにあてはまるものではない。あなたが、そして私が人生のあらしの中を歩んでいる時、信仰の目を、イエスとあらしの中にある私たちを取り扱われる彼の能力とに注がなければならないのである。

今のあなたの「あらし」は何だろうか。あなたは失業し、金銭的に非常に困っているだろうか。請求書が山積し、失望落胆しているだろうか。あなたはほかではない。あなたは、食と住の必要があることを知っている。そして、サタンはいつもこのような状況を利用して、あなたのところへやって来て言う。「見ろ、どんな苦境におまえが陥っているかを。おまえは、何という失敗をしでかしたんだ。これでは、家族も養えないじゃないか。いったいおまえは、どこから金が入ってくると思っているんだ。」このようにして、サタンは責め続ける。サタンの意図は、あなたの目を、あなたの愛する、力強い、すべてを備えてくださる天の父からそらせ、あなた自身とあなたの問題に注がせることにあるのである。

ペテロがそれをした時、どのようなことが彼に起ったかを思い起していただきたい。私たちの必要を満たされる神の約束により頼まなければ、私たちにも同じことが起るであろう。

「私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください」(ピリピ四・一九)。

「見よ。わたしは、すべての肉なる者の神、主である。わたしにとってできないことが一つで

もあろうか」(エレミヤ三三・二七)。

もし私たちが、信頼の目をキリストから離し、問題に注ぐなら、たとえ、それが、自分のことは自分で処理しようという善意から出たものであっても、絶望と敗北の中に沈み始めることだろう。

信仰、かぎ

あなたは、自分自身に向かって、次のように言うかもしれない。「それは、すばらしい、ハル。ところで、私に必要なのは、そのような教訓が私にとっても効果があるということを信ずる信仰だ。」

あなたの言う通りである！ 信仰は、主がすでに備えておられるすべてを、私たちのものとするためのかぎである。この理由により、サタンは、 $\wedge$ 信仰とは何か $\vee$ 信仰はどのようにに働くか $\vee$ ということについて、私たちを混乱させようとするであろう。

私たちが、神のために生きるべきすべての霊的資産と武器に関して学び始める時、サタンは、やって来て、あなたが今しがた考えていたこと——「神の備えは皆、すばらしい！ もし私がいこれらの神の備えを用いるだけの信仰を持っていれば、すばらしいのではないだろうか」——をささやくであろう。

どれだけあれば十分なのか

ひとたび、サタンが信仰を量的に考えさせるようになると、私たちはだめになってしまう。「もつと信仰があったらなあ」と言うのは、信仰についての基本的な誤解を反映しているものである。

信仰とは、責任である。人神の能力に、対する私の応答である。信仰は、そのように単純なものなのである！

聖書的な信仰においては、信仰に力を与えているのは信仰の対象である。イエスは、もし私たちがからし種ほどの小さな信仰を持っており、もしその信仰がイエスご自身に向けられているなら、山を動かすことができると言われた。信仰には、力は少しもない。力はイエスにある。

信仰は視力に似ている。視力があるためには対象がなければならない。信仰も力強いものであるためには、対象がなければならないのである。そして、その対象というのはキリストであり、十字架において私たちのために備えてくださったことである。

クリスチャンが、神に、もっと信仰を与えてくださいと言っているのを聞くほど、悲しいことはない。信者は、ひとりひとり皆、すでに百パーセントの信仰を持っているのである。確かに、ある者は他の者よりもはつきりと神を見ている。しかし、それは、その者が信仰の対象である神

の近くまで進んでいるゆえんなのである。

もし、あなたが、ある山から百キロ離れたところに立っているなら、山は、もうろうとしていてはつきりとは見えないだろう。あなたはその山について、多くのことを知っているかもしれない。しかし、あなたが、これまで以上に山に近づかなければ、山は決して大きくはならない。

私たちは、神に近づいて、神をよく知り、神がご自身の子らのためにしてくださった、今日の世において生きるためのすべての備えを、見出さなければならない。もしそうしないなら、神の私たちの必要を満たす偉大な能力に応答することはできない。

信仰の跳躍、ジャンプ

あなたが、燃えているビルの五階にいますとしよう。逃げ道はない。あなたは、窓ぎわに閉じ込められてしまったのである。煙のために、下を見ても地面は見えない。しかし、突然、あなたは、「飛び降りてください。下に網を張りましたから」と叫ぶ声を聞く。

恐怖があなたの心を捕える。あなたは、この世のサディスト的な人々のことを考えている自分を見出す。下で叫んでいるのは、精神異常者であるかもしれない。あなたは、彼について何も知らないのです、少しも信頼していないのである。

突然、あなたは別の声を聞く。それは、あなたが聞きなれた声である。その声は次のように叫

ぶ。「お父さんだよ。飛び降りなさい。網が張ってあるから。」あなたが父に対していっている信頼と、父のあなたに対する愛に力づけられて、あなたは、自分自身を父にゆだね、そして飛び降りる。あなたが、暗やみの中を落ちて行く時、あなたが見出すものは何であろうか。「永遠の腕が下に」(申命三三・二七)。

キリストを注視し続けよ

あなたはこれまでに、だれかが「あなたが問題を持っている時、しなければならぬのは、イエスを見つめることだけです。そうすれば、問題は解決します」と言うのを聞いたことはないだろうか。私は、だれかが、初めて私にそう語った時のことを覚えている。私は、問題を持っていた。それで私は、自分の好きなイエスの絵を思い浮べながら、頭の中にイエスの姿を描き出そうとした。私は、この絵のことを考え続けたが、それは、私の問題の解決には全く役立たないようであった。

私は、その時、イエスの心像以外に、イエスに関して注意を集中すべき何かがあるに違いないと考えた。私は、そのような事態が自分に起ったことを喜んでいる。なぜなら、それは、イエスに注意を集中する時、私が見つめるべきものは何であるかということを、よく考えさせたからである。

まず第三に、私は、神が無条件で私を愛しておられるということを知らなければならない。第二に、私は、私の罪についての神のゆるしは、すべての罪——過去、現在、未来におけるすべての罪——をカバーしていること、そして、神は、どの罪をも私につきつけられることがないことを信じなければならない。第三に、神が私の人生に対する計画を持っておられること、そして、神が、私に起ってくるすべてのこと——一見、よいことであろうと悪いことであろうと——を働かせて、私のために益としてくださることを悟らなければならない(ローマ八・二八)。そして、最後に私は、神がこの上なく忠実なおかたであられること、そして、彼が聖書の中において、私にされたあらゆる約束を守ることがおできになることを知らなければならない。

試練における勝利

あなたが、これらの事実を知り、それにより頼む時、あなたは、神があなたの人生に起ることを許容された試練に適切にかかわることができるのである。あなたは、それらの試練が皆、あなたの人生において、のろい的手段としてではなく、祝福の手段として計画されていることを悟ることができよう。試練があなたにもたらされる時、あなたは、「私は、神がこの上なく私を愛しておられることを知っています。それで、神は、そのような大きな愛と矛盾することは、どのようなことも、私の人生に起ることはお許しにならないのです」と、言うことができるのである。

あなたは、神があなたのすべての罪に対してキリストをさばかれたことを知るに至ったので、この試練が、あなたの何らかの隠れた罪に対する仕返し、あるいは、何らかの理由であなたを罰するためではないことを知っている。神は、すでにあなたのすべての罪のために、キリストを罰しておられるのである。

試練や悲劇があなたを襲う時、もしあなたが、神の総合的な計画を知っており、神がこの事態をあなたのために、よきに用いようとしておられることを知っているなら、あなたは、その試練のゆえに、神をはめたたえることができるのである。あなたは、困難そのものの中に、少しのよいものを見ないかもしれない。そして、よいものは、実際に何もなし。しかし、神は、それをあなたの人生における最大の祝福に変えようとして力を尽しておられるのである。もしそれが起らなかったなら、あなたは、神の特別な祝福を受けると言うたぐいまれな特権を失うことになったであろう。

あなたの神は小さすぎるか

私たちが、私たちの必要のためになされている神の驚くべき備えを理解するにつれて、私たちは神を、私たちの問題よりも大きなものとして見るようになる。もし、私たちの生活における困難が、なお神の手におえないもののように思われるなら、私たちの神は私たちにとって小さすぎるのである。

ひとたび、私たちが次のことを悟るなら、すなわち、問題はどれだけの信仰を私たちが持っているかということではなく、イエスが、どんなに忠実で、信頼するに足る、力強いおかたであられるか、ということであると悟るなら、私たちは、クリスチャン生活における戦いに対する備えができたのである。私たちが、私たちの持っている信仰——それが、大きな信仰であれ、小さな信仰であれ——を取って、それを主イエス・キリストのうちに置くなら、それは、私たちを通し、私たちのために働くイエス・キリストの御力を解放することになる。

もし、私のための神の備えが、常に私の信仰による把握を少し越えたものであるなら、これらの霊的な資産はいったい私にとって何の役に立つのだろうか。どうして、私は成長することができだろうか。それは、にんじんをろばの前におらさげて、ろばを前進させようとするものである。何らかの進歩に似たものがもたらされるかもしれないが、それには、得たいと思うものがどうしても得られないという欲求不満を伴う。

神の豊かな祝福は、常に私たちの信仰を少し越えたところにあるといったようなことはない。それどころか、聖書には、「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいまし、た」(エペソ一・三)と記されている。肉と、世と、悪魔に対する勝利は、今私たちのものなので

ある。

力と権威

本書では、聖書を通して信者のうちに働く力について、多くのことが述べられてきた。しかし、最初から今まで、私たちが用いうる権威については何も述べられなかった。実際、キリスト教界においては、この大切な真理についてほとんど何も言われていないようである。しかし、悪霊やサタンからの攻撃を取り扱う場合には、この権威という霊的真理を理解し、自分のものにするほど重要なことはない。

あなたは、「クリスチャン生活において、力と権威とはどう違うのか」と言うかもしれない。

この二つの間には、大きな相違がある。新約聖書のギリシア語においては、二つの語が終始一貫して、それら二つの概念を表すために用いられている。「デュナミス」という語は、クリスチャンのうちに働いている聖霊の御力を述べるのに用いられている。「エクスーシア」という語は、権威を述べるのに用いられている。不幸にして、翻訳者たちは常に、「エクスーシア」を、authority（権威）ということばに訳しているとはかぎらない。

「エクスーシア」は、委任された力を意味する。

偉大な神学者であり、また私の友人であるF・ヒューゲル博士は、これらの二つの概念の相違

を私に例証してくれた。私たちは、メキシコ・シティのレフォルマ通りの近くに座して、悪魔の世界に対する信者の権威について論じ合っていた。その時、博士は次のような話をしたのである。彼は、ラッシュ・アワーの交通の込み合っている時に、レフォルマ通りを横切ろうとしていたメキシコのボーイ・スカウトのグループについて語った。彼らは、広い通りを半分ほど渡ったところで、一時、待機していた。そこには台があり、その上に交通巡査が立って交通整理をしていた。少年たちは、交通巡査が右腕をあげると、すべての自動車がいっせいに停止するのを見守っていたのである。

メキシコ・シティでは、その台は、権威の場所である。そして、すべての自動車運転者はそのことを知っているのである。

ちょうどその時、近くでちょっとした交通事故が発生した。それで、交通巡査は、その事故を調査するために定位置を離れた。交通巡査が運転者と論じ合っている間に、ボーイ・スカウトのひとり、その台に上り、右手をあげた。すると、ただちに走っていた自動車の群れがピタリと止まった。運転者たちは、その少年が権威の場所に立っていること、そして、メキシコ政府のすべての力が台の上に立っているその者の背後にあることを認めていたのである。

その少年が、自分自身の力でそれらの自動車のうちの一台を止めようとしたと想像していただきた。それは、少年の力対自動車の力で争うことになったであろう。どちらが負けるかは明らか

かである。私たちが、私たち自身の力で悪魔を取り扱おうとするのも、まさにこれと同じである。私たちは、手も足も出ないであろう。

しかし、自動車の運転者たちは、小さな少年が権威の場所に立っている時ですら、止まらなければならなかった。なぜなら、メキシコ政府のすべての力が、その右腕のひとふりによって呼び出されたからである。

私たちが、私たちの権威の場所を悟り、その中に入る時も同じ原則が適用される。ただ、私たちの場合においては、神のすべての御力が私たちの背後にあり、サタンさえそれを尊重し離れ去らなければならないのである。

権威を発動することは、委任された力の領域内において活動することである。権威の偉大さは、それを委任した者の力の偉大さに正比例する。

信者の権威の場合においては、宇宙における最も偉大な力——イエス・キリストご自身——がその背後にある。彼は、「わたしは天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」(マタイ二八・一八)と言われた。

キリストの権威

たいていのクリスチャンは、キリストの力と権威について、あるばくぜんとした概念を持って

いる。しかし、大部分の者は、△のようにしてキリストはご自身の権威を得られたか。あるいは、それは彼らとどのような関連を持っているか▽を的確に示すことができない。

私は、△キリストがサタンを破って勝利を得られた▽という真理にまさって、私の人生における神のお働きを全面的に理解する基礎となっている真理を考へることができない。キリストが、どのようにしてあなたの三つの大敵——世、肉、悪魔——に勝利を得られたかを知るまでは、キリストにあるあなたの勝利の立場を正しく評価することは不可能である。

パウロは、新約聖書の多くの箇所において、すべての敵の勢力をキリストに、そしてキリストを信する人々に服従させる神のご計画を、一点の疑いの余地もないまでに明確にしている。

キリストが、ご自身のために、そして私たちのために、権威を獲得されたことを要約している三つのことばがある。それは、十字架につけられ、よみがえり、そして天にのぼられたということばである。

たとえば、あなたがこれらの三つのことば以外に、聖書について何も知らないとしても、あなたは、日ごとに勝利のクリスチャン生活を送るに十分な知識を持っているであろう。

十字架につけられた

キリストが、私たちの罪を負って十字架にかかれた時、私たちの罪とその結果である死を負

われたのみではなかった。私たちは実際に、そこで彼と共に十字架にかかったのである。このキリストとの完全な一体性こそ、パウロが、ローマ人への手紙六章において、私たちに悟ることを望んでいる驚くべき真理である。

神が、ご自身の怒りとさばきを私たちの罪の上に注ぎ出された時、私たちの罪の罪責をもってキリストをさばかれたのみでなく、また、私たちをもさばかれたのである。キリストが、罪の最後の一刺し——死——を経験された時、私たちもまた死んだのである。

私は、神の子の死のニュースが地獄に伝わった時、そこに起ったに違いないヒステリックな喜びについてしばしば想像をめぐらしてきた。サタンは、キリストの死が実は自分のひつぎに打ち込まれた最後のくぎであったことも知らずに、キリストの十字架上の死に万歳を叫んだのである。

イエスのご生涯において、サタンは、幾度もイエスに罪を犯させようとした。サタンは、イエスを、罪の結果である死の害をこうむりやすい状態に追い込もうとしたのである。イエスが、人類の罪を負い、それらの罪のゆえに進んで死なれるのを見た時、サタンは、彼が神との戦いにおいてついに勝利を得たと思ったのである。サタンは、こうかつにも、神の最初の完全な人、アダムを罪に陥れた。そして今や、神の第二の「アダム」、イエス・キリスト、完全なおかたもまた、罪と死をになっておられるのである。

その三日三晩の間、サタンと彼の悪霊たちの間に、祝賀のための乱痴気騒ぎがあったに違いない。

い。——それは、真にむなしい週末であった。しかし、それが終ると、沈黙がサタンとその手下どもをおおった。彼らは、驚きに打たれつつ、全能なる神の御力のこれまでになかった最大の顯示を見守っていたのである。

神の御子は、死よりよみがえられた！

そして、私たちも同様によみがえったのだ！

復活の力

「死よ。おまえのとげはどこにあるのか。墓よ。おまえの勝利はどこにあるのか」(一コリント一五・五五欽定訳)。

サタンの敗北は定まっている！ イエスの復活によって、サタンは永遠に、彼のイエスの人間性に対する権威、イエスとの一体性を主張するすべての者に対する権威を失ったのである。

サタンが、その手下どもの前で、どんなにくやしがつたか、ちよつと想像してみただきたい。勝利者になるどころか、敗北者となったのである。彼とその手下どもは、イエスの勝利の行列における捕虜となったのである。

パウロは、私たちに、「彼(キリスト)は、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました」(コロサイ二・一五英訳)と告げている。

イエスが、サタンと彼の悪霊たちから、その權威を奪い去られた時、その勝利は私たちのものとなった。サタンの思いにおいては、イエスがサタンの征服者であるのみでなく、キリストにある者たちもまた、彼の征服者である。

サタンは、自分が信者の生活に干渉するどのような法的権利も持っていないことを知っている。しかし、もし彼がこの真理を隠しておくことができるなら、私たちの生活において好き勝手にふるまうことができるであらう。

私たちは、イエスがこれらの敵の「武装を解除」されたと告げられている。まさにその通りである。サタンは、歯のないブルドッグのようなものである。サタンは、うなったり、おどしたりすることができない。しかし、彼は、信者の生活に対する脅迫を裏づける權威を何も持っていない。もし私たちが、このことを知らないなら、あるいはそれを信じないなら、私たちは、彼が私たちをおどすのを許容することになるだろう。そして、彼は、そうすることにかけては名人である。彼は、クリスチャンたちがふるえあがり、恐れて逃げ出すのを見るのが好きなのである。

神とサタンは、対立しているが、等しい力と權威を持っていると考えている人がたくさんいる。しかし、これほど大きな誤りはない。サタンは、打ち負かされた敵である。しかし、彼は、生きており、健在であり、そして、はったり、おどし、脅迫、言いがかりをつけること、誘惑の名人である。

十字架と復活において、自分自身がキリストと全く一体であることを知らず、また、それにより頼むことをしていない信者は、サタンのこれらの悪賢い攻撃の格好の的となる。

キリストとともになる昇天

私は、キリストのサタンに対する權威の地位を含む三つのことばがあると言った。私たちは、イエスの十字架と復活が地獄の軍隊に対して、どのような結果をもたらしたかを簡潔に考察してきた。

神のあがないの全計画の頂点は、キリストを神の右に座せしめ、キリストの敵を永遠に彼の足の下に従わせることである。キリストの敵は、どのような敵でも皆、私たちの敵である。そして、キリストの足の下に従わせられている者は皆、私たちの足の下に従わせられている。なぜなら、「私たちはキリストのからだの部分」(エペソ五・三〇)だからである。

私は、神の御思いにおいては、キリストと全く一体なので、キリストについて真理であることは、また、私にとっても真理である。

キリストは今、神の右にある御座——全宇宙における最大の力と權威の中心——に座しておられる。そして、私たちも、キリストと共に、そこに座せしめられているのである。キリストは、ご自身が持つておられるのと同じ權威と力の使用を、私たちがこの地上にいる間、私たちの共同

の敵に対して用いるように委託しておられる。

それは、一見奇妙なことではないだろうか。神は、罪人である私と私の罪を、この上なく徹底的に処理してくださったので、その結果、すでに、私をキリストと共に天に座せしめておられるのである。私は今、カリフォルニア州に立っているかもしれない。しかし、私はまた、天に座せしめられているのである。このことが私にとって真となるのは、私が死んで天国に入ってからではない。私は、その時まで待つ必要はないのである。

私たちの法的権利の要求

私がこれまでに述べてきたこれらの真理は、神の子どもひとりひとりとって、「法的な」権利である。これらの法的な事実は、「神の聖なる法廷」において、幾時代も以前に永遠に解決された。何ものも、それを無効にすることはできない。そして、信者がキリストにある彼の力と權威を用いることを妨げうる唯一のものは、彼のこれらの真理についての無知、あるいはそれらの真理を信ずることの拒否である。

エペソ人への手紙一章一八―二三節および二章四―七節において、パウロは、私たちの神の子どもとして受け継ぐ遺産が、どのようににすばらしいものであるかを悟るように熱心に勧めている。神は私たちに、「やがて与えられる空中にあるパイ」のようなものを提供しておられるのではな

い。パウロの用いているすべての動詞の時制は、私たちの、今の神的な地位を強調している。

「また、あなたがたの心の目がはつきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのようにに榮光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのようにに偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自身の右の座に着かせて、すべての支配、權威、権力、主権（これらはサタンの力をさしている）の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり……。」

「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、イエス・キリストにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかに示しになるためでした。」

イエスのすばらしい御名

「それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです」(ペリピニ・九一一)。

「イエス」という御名には、神によって、あるいは人によって、これまでに語られた他のどのような語にもまさる力がある。

私たちが祈りにおいて、イエスの御名を用いる時、父なる神は、その御名が含んでいるすべてを知っておられ、また、信仰によってそれを用いる者にもたらされる豊かな祝福をも知っておられるのである。

今日、私たちが、人々に救いのよいおとずれを宣べ伝えるにあたって、そのすばらしい御名を宣言し、そして、彼らがその御名によって、彼らのためにどのようなすばらしいことがなされたかを信ずるに至るなら、彼らは、暗やみから光へと移されるのである。

しかし、他のどのような領域にもまさって、その御名の力を知っている領域がある。それは、サタンの領地である。

信者が、彼が天においてキリストにある権威の地位に座していることを知って、その御名を、サタンあるいは悪霊たちに対して用いる時、彼らは離れ去るに違いない。彼らは、御名を聞くこと恐れおののく。なぜなら、それは、彼らにとってイエスの復活の時にける彼らの屈辱的な敗北を表しているからである。

賢者への一言

イエスの御名を用いることはまた、信者に、△サタンの征服は、キリストの勝利であった▽ということを想起させる。私たちは、キリストのゆえに勝利者となっている。もし私たちが、キリストの十字架の背後からあえて飛び出して、私たち自身の力でサタンと戦おうとするなら、必ず敗北するのである。

私は、熱心な信者たちが、キリストにあるこの新しい権威を把握し、しばらくの間はうまくいっているのを見てきた。それから、彼らはそのような力を持っていることを自慢するようになる。そしてやがて、サタンに命じてクリスチャンから悪霊を追い出そうとするのである。サタンは、私たちの偉大な新しい力をもって私たちを増長させるために、最初の二、三回は、「ころげまわって死んだふりをしている」ことであろう。しかし彼は、実はチャンスのを来を待っているのである。そしてひとたび、自分こそサタンの征服者であると確信するようになれば、私たちが

地面におお向けに打ち倒され、いったいどうしてこんなことになったのかと、きろきろ見回すようになるのは時間の問題である。

イエスは勝利者であられる。そして、私たちがイエスのうちにとどまり、彼の御力により頼み、彼の得られた勝利を当てにしているかぎり、彼は、それを私たちに委託しておられる。しかし、もしあえて私たち自身の力と権威により頼むなら、私たちは、サタンの敵ではない。

安全な唯一の場所は、天の御座である。それは、敵の陣営の「はるか上」にある。そして、私たちが、心の中でそこにとどまっているかぎり、私たちはサタンに攻撃されることはない。

サタンは、あらゆる策略を用いて、私たちを天から引きおろし、私たち自身の力でサタンと戦わせようとするであろう。しかし、もし私たちが、御霊によって歩んでいるなら、私たちの日常生活は、人私たちは、キリストと共に、彼の権威と力の場所に座せしめられているVという意識をもって過されることであろう。

イエス・キリストは生きておられる

この世は、その問題のゆえにうめいている。心は、必要を叫び求めている。今日、キリストなしでどうして生きて行けるだろうか。

もし、あなたがキリストを知っているなら、あなたの心はキリストをまだ知らない人々のこと

を思つて痛まないだろうか。もし、キリストを知っているなら、勝利の生活をしているだろうか。

朝ごとに、神の与えてくださった新しい日に目ざめる時、私たちは武器をつけ、キリストと共なる私たちの座につく必要がある。私たちは、私たちのためになされたキリストのみわざにより、世、肉、悪魔に対して勝利を得ていることを覚える必要がある。個人的には、イエスに対する献身を再確認し、聖霊が、瞬間瞬間、自分を支配してくださるのを許容しているのである。

一日が次第に経過していくにつれ、この世的なものが押し迫ってきて、もし私が罪を犯すようなことがあれば、してしまったことを率直に認め、それを天の父と話し合う。すると、天の父は、それでもなお私を愛し、受け入れてくださっていることを話して、力づけてくださる。もし私がだれかを傷つけてしまうようなことがあれば、それをつぐなうために努力する。

私が絶えず経験している最大の祝福の一つは、イエスに私の「自責」と罪責の重荷を負っていただくことである。この真理は、神が教えてくださったどのような概念にもまさって、私をサタンから解放するのに役立っているのである。

私たちは、何という時代に住んでいることだろう。私たちは、「主権、力、この暗やみの世界の支配者たち」が、この地球をとりまいてのを見る。しかし、私たちは、勝利をもたらすキリストの権威、キリストの力を持つことができるのである。それを、世の人々に告げよ！

どうか、あなたの人生に新しい自由をもたらし、将来に新しい希望をもたらすために、神が、これらの解放の真理を用いてくださるように。イエスが十字架から叫ばれた、私たちの勝利の叫び——「完了した」——を忘れないでいただきたい。

テレスタイ(完了した)！

注

三 章

注¹ Donald Barnhouse, *The Invisible War* (Grand Rapids, Mich.: Zondervan Publishing House, 1965).

注² 同書。

四 章

注¹ Albert C. Wedemeyer, *Wedemeyer Reports* (Henry Holt and Co., 1958).

注² William Arndt and F. Wilbur Gingrich, *A Greek-English Lexicon of the New Testament* (Chicago: University of Chicago Press, 1959).

注³ Barnhouse, *The Invisible War*.

注⁴ Francis Schaeffer, *The God Who Is There* (Chicago: Inter-Varsity Press, 1968).邦訳「神の存在の神」(福音社)出版。

五章

注1 Merrill F. Unger, *Demons in the World Today* (Wheaton, Ill.: Tyndale House, 1971).

注2 同書。

注3 同書。

注4 同書。

注5 Jesse Penn Lewis, *War on the Saints*.

八章

参照聖句 イコリント二・二三、ローマ六章、コロサイ三・一二五、エペソ一・二三、二・一〇、三・一四一二、ガラチヤ二・二〇、三・二六一二七。

サ タ ン

¥ 850

昭和50年10月30日発行

著者 ハル・リンゼイ
訳者 松代幸太郎
印刷 いのちのことば社印刷部
発行所 いのちのことば社
160 東京都新宿区信濃町 6
乱丁落丁はお取り替えます

© いのちのことば社 1975

0016-001261-0355